

明治四十四年六月十五日發行（每月一回十五日發行）

求道

第 八 卷
第 三 號



求道第八卷第叁號目次

求道

◎他力信仰の妙趣

自督

◎煩惱の所爲

講話

◎如來の加威力

告白

◎御待兼ねとは自分の事であつた

近角常觀

◎如來様の御直言

小林しづ

◎人生の意義は信仰にあり

山名花

◎信の力

近角常觀

◎まことの愛、まことの節操

同

信界

◎決定 解決

時報

◎夏期傳道日割

七月九日より十五日迄一週間

毎朝午前八時開會

夏期求道會

本郷森川町一帯地

求道學舍

詳細は本號一二八頁ヲ見ラレタシ

定期講話ハ夏期中求道學舍

第二第三求道會トモ休講ス

求道

第八卷
第叁號

他力信仰の妙趣

信仰の事もあまりに六ヶ布考へらるゝの極、平凡の人の企て及ぶべからざる様に誤解さるゝ傾がある、信仰は決して豪いとはない、人間として必ず兼ねねばならぬものであるが亦何人も容易に得らるゝものである、信仰といへば偉人傑士の事業であるかの如く思ふは大なる誤である、一文不通のものが如來廻向の一つによりて、忽に信心獲得が出来るのである。併不思議なことには如何なる愚痴なる人でも信樂開發の一念直に廣大勝解の人となるのである、俗に云へば大に分つた人となるのである、要領を得る人となるのである、これは事實である、不思議といふより外に申様がない。

そこで何人も其信樂開發の一念に達したいと求むるのである、しかるに夫が如來廻向であるゆへに、此方より求めて得るのではない、此方から求めて得るなれば自力廻向である、しからば如何にすると可いかと云へば外ではない、聞其名號じ

や、觀佛本願力じや、要するに如來の御思召をきくに限る、決して六ヶ布の事はなし。

如來の思召といふは外のことはない、我等罪業深重の衆生徒に煩悶懊惱して善を爲さねばならぬと知れども、爲すこと出来ず、惡を爲しては可かぬと承知しながら惡を爲し、自ら苦しみながら煩悩を起し、恃むべからざる夢の如き人生を頼みとし、生死海中に流轉しつゝある有様を觀をなはして、深き大悲の御心より憐愍矜哀の思やるせなく、よく我等の根機性分を知ろしめして如何にも可愛想に思召され、普通の法によりて助かることの出来ざる點を御存知ありて、夫を助けんとある思召が超世の本願といふことである、此點に深く注意して聞かねばならぬ、何れの法にても、何れの行にても助からぬものを助けんといふ點が難有いのである。

人間は善を爲さねばならぬ、惡を爲てならぬといふことは誰も能く承知して居ることである、其通り出来さへすれば人生問題の解決は容易である、人は生を欲する死を嫌ふ、若し其通りに出来たなれば人生の煩悶はない、しかるに其善が出来ない、惡が止められない、其生が得られぬ、死が免がれぬ、是に於て種々の形を以て百般の人生問題が起り来るのである

る、しかれば善が出来ずとも可い、惡を爲しても可い、生きても死しても可いではないかと言はれても、そうは承知出来ぬ、出来ぬ善を爲たい、止められぬが惡は止めたい、生は得たい、死は避けたい、而して一として望む通りに出来ない、此の如く我等は正しき道と煩惱の間にはさまりて、何んとも致方がない、此に於て其致方なき我等を憐愍したまふが抑々大悲大願の淵源である、出立點である。

何人も佛とは如何といふ疑問を提出するものであるが、我等と無關係に佛を信することは出来ぬ、殊に阿彌陀如來といふ御佛は若し超世の願がなかつたならば顯はれて下さらぬのである、きりつめて言へば我等が果して理想的に實行するところが出来たならば、阿彌陀如來は顯現したまはなんだのである、阿彌陀如來といふ全體が、此の如く煩惱を以て苦しみつゝある我等を見捨てたまふとが出来ぬ大悲心が本となりて、超世の本願即ち普通で助からぬものをたすけんとの選擇本願を建てたまひたのである、そして成就されたのが即ち念佛である、かくして正覺を成したまひし御佛が阿彌陀佛である、故に本願は阿彌陀如來の顯はれたまふ根元にして、亦た今現在に我等を招喚したまふ如來の思召である、即我等が罪業深重な

るがために五劫思惟の御苦勞を爲し下されたのである、而して十劫已來我が親心が分からぬか／＼と待ちかねて呼びたまふ勅命が本願である。

此やうせなき誓願をさかば何人も信せずには居られぬ、不思議と叫ばざるを得ぬ、かくまでも私一人の爲に御苦勞下されたかと頂かねばならぬ、善を爲たい、そして出来ぬ、爲せと命ぜられても致方なく、出来ずとも可いと言はれても可いとは横着になれぬ、しかるに佛かねてしろしめして私の出来ない點を憐みたまひて、其者をたすけんとて永劫の御苦勞を爲して下されて、今現に阿彌陀佛となりて我を待ち兼ねたまふをさかば、いかでか大悲大慈をただかずに居られやう、聞其名號信心歡喜其一念に親心をいたゞくのである、若し生者のちかひゆへ、信樂まことにときいたり、一念慶喜するひとは、往生必ずさだまりぬ、といふ實に此點である、法然聖人より親鸞聖人への附屬の文に、彼佛今現在に成佛したまへり、當に知るへし、本誓重願虚しからず、衆生稱念すれば必ず往生を得とある、實に此親心をさして信心開發する一念の心持である。そこで此一念を以て直に至心に廻向したまへりと仰せられた、實に此一念は如來が至心に我等に廻向したまひたのである。

る、是れ初めに言ふたる通り如來廻向の一つによりて信心獲得が出来るといふた點である、信卷及び略文類に薄地の凡夫、底下の群生淨信獲難く極果證し難きは畢竟往相の廻向に由らざるか故じやとあるは實に此點である、決して無上妙果が成じ難きにはあらざるも此信樂を獲るのが六ヶ布いのである、何んとなれば此如來廻向に由らずして信仰を得んとするからである、しかるに信樂を獲るは外ではない、如來の加威力に由るのである、如來より直々に威神を加へたまふのである、曇鸞大師が天親菩薩の一心を釋して、如來威神を加へたまふにあらずんば將何を以てか達せん、是故に仰て告ぐと申されたも是である、信卷に往相の一心を發起すると申されたも是である、實に是れ佛智他力の御授けである。

亦本へ反りて繰り返すことになるが、夫故此佛智他力を聞けば此信が授けられるのである、其他力とは如來の本願力である、撰擇本願である、超世の本願である、行卷は十七願である、南無阿彌陀佛であるが、其中にはすべて如來の本願がこもりてある、如來の親心の總體である、夫を釋尊がしらしめて下さるのである、無量壽佛の威神功德不可思議なることを讀嘆して知らして下さるのである、其彌陀の本願の儘釋尊の仰

せの儘を知らして下さるのが法然上人の仰せてある、南無阿彌陀佛である、十方群生海此行信に歸命したてまつれば攝取して捨てたまはず、とあるが即ち南無阿彌陀佛のいはれてある、如來の本願の儘である、本願招喚の勅命である、發願廻向である、此親心を聞き、此不可思議の佛智を信じ、此廻向をいたゞきたのが即ち信心である、信樂開發である、信心決定である。

我等は罪業深重の石の塊である、如來は夫を見捨てたまはぬ大悲大願の念力である、我等はいよ／＼此念力の達せざる限り、此御心をいたゞかぬ間は、罪を罪ともしらぬのである、此念力親心の届かぬかぎりには如來も御満足をなさらぬのである、しかるに遂に大悲の強力やるせなくして遂に我等に達して下された一念、我等は唯だ如來の御心のいかにもやる瀬なく極りなきに感泣するのみである、我等の罪業深重を懺悔するのみである、かく親心をいたゞく一念親様は實に此上もなき大満足に思召さるゝのである、五劫の思惟永劫の修行十劫已來の待ち兼ね、唯此選擇願心をとゞけんためにてありき、我汝を待つと久し、汝遂に我心を得たるか、我思を受けたるか、御文に所謂阿彌陀如來は深く喜びまし／＼て其御身より八萬

四千の大光明を放ちて其慈懷に攝め入れて下さるのである、是實に攝取不捨である、此に於て極惡深重の衆生大慶喜心を得て諸の聖尊の重愛を獲るのである、善導大師が希有人、最勝人、妙好人、好人、上々人、眞の佛弟子と仰せらるゝ身となつたのである。

嗚呼如來の本願は十方衆生を如來の大家庭に引入れんとての大計畫である、攝取不捨の一念實に其家庭の人となつたのである、大小の聖人、輕重の惡人皆同じく齊しく選擇大寶海に歸して、四海兄弟同一念佛の一家庭の人となるのである、我等信仰生活は實に此眞の佛子として、盡十方無碍光の照護の下に士農工商各々其職に従事しつゝ、如來大悲の母、本師慈尊の父、諸佛菩薩眷屬護念の下に感謝の生活を営むことである、而して臨終一念の夕大般涅槃を超證するときは、無量光明土の淨國に於て無爲常樂の眞實證を實現して、猶生死の齒、煩惱の林に遊戯して、生々世々の父母兄弟を利物度生すること自由である、他力信仰の妙趣實に不可思議の極である。

煩惱の所爲

自 督

○歎異鈔の第九章に示されたる唯圓房の不審と、之に對して聖人の同一悲歎は實に信後生活に於てヒシ／＼實驗するところの事實じや、若し此章がなかつたならばたしかに、ハタと行きつまつてしまふであらう、往くも死せん、歸るも死せん、住るも亦死せんといふことは初一念ばかりではない、後念相續に於ても同様じや、何んとなれば後念は初一念の繼續反覆たるに過ぎないのじや。

○夫につきて根本的に告白せねばならぬ事は私が「教行信證」を熟讀して頂く様になつた動機は、信卷に引用せられたる涅槃經の阿闍世王入信の文を拜見して、大に驚いたのが抑々の源である、如何にも我胸中の有様が見抜いた様に書てある。

○次手ながら我心を見抜かれるといふとは、實に信の一念に於て無意識に佛の御慈悲をいたゞいた心持じや、否私など御慈悲を話しつゝあるとき聴て下さる方が自分の心を言ひあて

られたる心地して、思はず知らず落涙さるゝことがある、そしてまだ御慈悲が分らぬといふ人がある、言ひ當てられたのが、佛の御慈悲ではないか、佛かねてしろしめしとは此點じや。

○私が「教行信證」を見て言ひ當てられて見れば、實に私は其通りじや、願れば自分の煩悶によりて信仰に入りたる經過が恰も此文の通りである、そこで之を「懺悔録」では自己の入信の經歷と並へて紹介して置きた。

○併今よりふりかへりて見れば其時驚かされたは寧ろ其時の心中にあまりに共鳴したのであつた、されば其心中に於て相續しつゝある信の有様を以て遡つて、入信の經過を述べることになつたのであらう、されどたしかに此涅槃經の文に驚かされたは入信六年後の事實であつて、今考へて見れば寧ろ其の時の私の心中にあまりに適切であつたのである。

○して見ると信後も入信の状態の反覆たることを無意識に告白したやうなものであるが、今此御文を熟讀して見るに、成程阿闍世王自身としては入信の事實にして、既に總序にせよ又信卷別序にせよ、其つもりで御書きなされたことは明らかであるが、信卷終の文は親鸞聖人としては信後悲歎の文となつてある。

○定聚の數に入るを喜ばず、眞證の證に近くことを快まずといふは踊躍歡喜の心あるそかに候とか、またいそぎ淨土へまゐりたきころの候はぬと同意たることは勿論のこと、愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑することは實に煩惱の所爲である、よく／＼煩惱の興盛に候にこそあるは是れてある、御一代聞書にも愛欲も名利も皆煩惱なりて仰せられてある、阿闍世王の行爲は實に煩惱の所爲である、煩惱の興盛である、罪惡深重、煩惱熾盛である、阿闍世王は我等である、否我等日常の立活が皆阿闍世王である。

○かくなれば我等は一言も出ない、一寸とも頭が上がりぬ、併佛かねて知ろしめしての一句で蘇さる、復活する、佛かねてしろしめしてといふは決して唯圓房に安慰を與へるべく聖人が出まかせに言はれたのではない、たしかに手答へのある御言である、彼涅槃經の文に阿闍世王とは即ち煩惱を具足せる者なりとある、恐くは是であらう、前の文に此法を信ずる衆生もあり、そしる衆生もあるべしと佛かねてときおきたまへることなれば同一筆法である、佛かねてしろしめしての一句で如何に煩惱の興盛なもの、如何に疑謗嘲弄を蒙るも、無言の下に頭の下るのが難有い。

講話

如來の加威力

(求道學會日曜講話)

近角常觀

○そこで彼涅槃經の偈に世尊大慈悲、衆の爲に苦行を修したまふこと、人の鬼魅に著せられて、狂亂所爲多きが如しとある文である、實に妙な形容である、私は此形容を見るときは寧ろ自分の所行のことを言はれた様な心地がする、そして文章は明らかに佛の御苦勞を仰せられたものじゃ、そこでツク／＼考ふるに我等が實に鬼魅に著せられて狂亂所爲多きが如き有様であるを觀そなはして、佛は一層居たたまらぬ心地して御覽下さる御心じや、五劫思惟の御苦勞といふも是である、永劫の修行といふも是である。

○如意の釋に一には衆生の意の如し、二には彌陀の意の如しとあるが矢張是である、衆生の意の如くといふは善惡淨穢種々の境遇、種々の機類様々である、之に應じて佛は此を觀そなはして五眼聞かに照し、六通自在にして機の度すべき者を觀そなはして、種々に善巧方便して御苦勞下さるのである、今狂亂所爲如きが如しといふも我等は煩惱の所爲で氣も狂はんばかりである、之を觀そなはす佛は殊に其狂ひつゝある様子を現一層大慈悲の爲に氣も狂はんばかりである、よく／＼煩惱の強盛に候にこそ、いそぎまゐりたき心のなきものを殊に憐みたまふなり、「是を以て今、大聖の眞説に據るに難化の三機、難治の三病は大悲の弘誓を憑み、利他の信海に歸すれば斯を治して治し斯を憐憫して療したまふ」と仰せられたは是である、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

今日の題は『如來の加威力』であります。加は「くわへる」といふ字、威は威神力の威の字、即ち佛の廣大な威神力を我々の上に加へて下さるとの事でありませう。之は親鸞聖人が『信卷』の中に此の語を用ゐてお出でなされたので、先づ夫より申しますと、親鸞聖人御一代の御化導の一番骨子たる信、即ち佛の仰せを疑ひ無く信ずるといふ此の信をお示し下された『信卷』の初めに、

然るに常没の凡愚流轉の群生、無上妙果の成じ難きにはあらず、眞實の信樂實に獲ること難し。何を以ての故に、乃し如來の加威力に由るが故に、博く大悲廣惠の力に因るが故に。遇淨信を獲ば是の心顛倒せず、是の心虛偽ならず、是を以て極惡深重の衆生、大慶喜心を得、諸の聖尊の重愛を獲るなり。

との御言葉があるのとあります。又『略文類』にて、聖人が晩年に『教行信證』を簡單にしてお示し下された御聖教がある。

其の中にも同様の御示しがあるのである。全體『略文類』は聖人が『教行信證』中のごく肝腎な處丈けを略して我々に頂かせて下されたのだから、『教行信證』中の肝要の所が皆な此の中に出てあるのでありますが、夫れには、

然るに薄地の凡夫、底下の群生、淨信獲難く、極果證し難し。何を以ての故に、往相の廻向によらざるが故に、疑網に纏縛せらるゝによるが故に。乃し如來の加威力によるが故に、博く大悲廣惠の力によるが故に、清淨眞實の信心を獲れば、是の心顛倒せず、是の心虛偽ならず。まことに知んぬ、無上妙果の成じ難きにはあらず、眞實の淨信まことに獲ること難し。眞實の淨信をうれば大慶喜心を得。云々。

さて此等御文の意味を切り詰めて申せば、我々底下薄地の凡夫が佛に成り、眞の證り開く事は出来ぬ事では無い。無上妙果の成じ難きにはあらず。て佛に成らせて貰ふことは、誰でも成らせて貰はれるのであるが、其の佛に成るには眞實の信仰を獲ねばならぬ。其の眞實の信仰を獲るのが實に難いのである、との御示しである。茲にお出で下さる皆様は、既に多年聴きにお出で下され、此の信仰の容易ならぬ事は、よく／＼味はつてお出で下されるのであるが、一口に信仰と言ふもの、眞實の信仰を得ることは實に難い。『教行信證』初めの御文にも、

噫、弘誓の強縁は多生にも値ひ匡く、眞實の淨信は億劫にも獲回し。たま／＼行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。

とあつて、中々容易には此の信仰は頂けぬのである。去りな

がら、斯く信心は獲難い、難中の至難であるといふと、直ぐ皆様は、如何にも得難い、と得難い方にのみ屈托して、到底得られぬと思ふて仕舞ふからいかぬ。又此の得難い如來のお慈悲を有難く頂き、如何にも然らじやと心に決定出来た人は、今の御文の「たま／＼行信を獲ば遠く宿縁を慶べ」である。得難いにつけても、益々其獲難き仕合はせを獲させて下された御恩を慶ばせて貰ふ外は無いのであります。

さて信仰を獲る事は何故其のやうに六つかしいのであるか。乃ち「往相の廻向に由らざるが故に」である。如何に得よう／＼と自分で力み、如何に自分で聞き分けよう／＼と努めても、自分の力で作り出せる處の信仰では無い。往相の廻向として、佛の方より授けて下される所の信心である。佛の大悲のお心が、我々の心に徹底して下されての信仰である故に、幾ら自分で得よう、有難くならうと思ふても、自分の力で得られるものではない。即ち「往相の廻向に由らざるが故に」て、得られぬのは遣る瀬無き佛の仰せを此方が頂かぬからなのである。肝心の佛の仰せの方を頂かず、幾ら人のやうに喜ばう／＼と思つても、夫れでは往相の廻向に由らざるが故に、何日迄待つても喜ばれることは無い。殊に「由らざるが故に」とある此の由の一字が意味深いのである。世間の「由らぬから」位の事では無いのである。確に茲に佛よりやど、與へるぞと、親の方より我々に指しつけて下され、得なければならぬやうに仕て置いて下さるのに、――して夫れを頂けば其の一念に得させて下さる信心であるのに、其の向ふのお慈悲をば、我々「ハイ有難う」と頂く事はせず、此方の方より得度い得られぬと自分

て勝手に苦しんで居るのである。即ち「疑網に纏縛せらるゝが故に」で自分の方からあゝ斯うとの疑ひの網に蔽はれ、遣る瀬無き大悲の親の仰せをすがをに頂かぬから、眞實の信仰が得難いのである。其得難い信仰が然らば何うして獲られるのであるか。即ち「乃し如來の加威力によるが故に、博く大悲廣慧の力によるが故に、清淨眞實の信心を獲る」で、此方より得ようとして得難く、求めて求められる信心では無けれども、往相の御廻向と、あなたの方より遣る瀬無き御念力を私の上に指し向けて下さる。其の指し向けて下さる御廻向に遇ひながら、夫を有難うと頂かぬから得られぬのであるが、「乃し如來の加威力に由るが故に」と、佛の方よりあなたのお力を直さく私の上に加へて下さる。其の遣る瀬無き加威力によりて、獲させて貰ふ事が出来るのである。之が有難き如來の加威力であります。

今日は大分分りよく話す事になりますが、兎角往相の御廻向と言ふと、如來よりの下され物であると言ふ。其の下され物を頂かぬから得られぬのであるが、其の下さる物柄が頂けぬ、下さる往相の賜物が分らぬ、といふやうな氣がして、恰も玉かなんぞを眺める心になり、外より物でも眺めて居る心地で佛のおまことを見て居るから、頂けぬのである。玉かなんぞ物を貰ふ事のやうに往相の廻向を思ふて居るから頂けぬのである。往相の廻向と言つて、別に變つた物があるのでは無い。廻向とは佛の親様が、其の廣大の親心より、我々衆生を遣る瀬無く思召して下さる、其の遣る瀬無き御親心のまゝが廻向なのである。其廣大の親心をあゝ有難いと頂く處に

一念の信心は得させて貰へるのであるが、頂くには何か頂く可き或ものを頂き得なくてはならぬ。夫れは何を頂くのであるか。「本願成就の文」には

諸有衆生其の名號を聞きて信心歡喜し、乃至一念せん。

とあつて、信心とは其の遣る瀬無き佛の親心を聞かせて貰ふて、信心歡喜するのである。佛が如何に此の私の爲めに御心配下されてあるか、といふ其の遣る瀬無き大悲のお心が胸に聞えて下された一念が、信心なのである。即ち信心とて外に事があるのでは無い、大悲の親様の其の遣る瀬無き親心を聞かせて貰ふ一つなのである。

さて斯く言ふと、直ぐに又我々は此方より其の親心を聞き度いといふ心を起し、名號の謂れを聞き度い、佛の譯を知り度い、佛とは如何なる方であるか、其の親心とは何であるかと、親心や名號を直ぐ入れ物にして仕舞ふて、其の中味を知り度いとかがるのである。如來の御廻向、如來の加威力、御親心、名號、本願と言ふも、外に物があつたのでは無い。此の罪惡の私を可哀想である、不便であると遣る瀬無く思召し下さる、あなたの御親心一つなのである。此方は其の御親切な親心、御本願と承はりながら、其のものは何であるか其の譯は何うかと、何處迄もしどく詮索して居るのであるが、此方が其の疑ひの止まぬ淺間しき者なる事を哀れと思召し、あなたの遣る瀬無き大悲心から其の罪惡の私の上に呼びかけ、其の者の上に加へて下さる、あなたの親心、之が佛の名號であり、佛の加威力なのである。聞くといふは、此のあなたの御親切一つを聞かせて貰ふのである。「信卷」の中には、

聞くと言ふは衆生佛願の生起本末を聞きて疑心有ること無し。是れを聞くと曰ふ。

「其の名號を聞きて信心歡喜する」とは、即ち外では無い。我々斯る淺間しき日暮を爲し、日夜に煩悶をして居るのであるが、親様は始終此の身を哀れと思召し、晝夜不斷に、あなたの心は、遣る瀬無く私を哀れみ下され、日夜に、あなたの廣大な親心は、此の私の上に蒙つてある。「和讃」には

慈光はるかにかふらしめ、ひかりのいたるところには、法喜をうとぞのべたまふ、大安慰を歸命せよ。

斯くの如く哀れみ下されてあるのである。併しながら之れを此方から斯く考へ、然う思ふのであると思ふてはならぬ。思ふのでは無けれども、親様の方では親の心のありなりで、常に斯く私の上におこころを加へて居て下さるのである。聞くと言ふは此の廣大な親心一つを聞かせて貰ふのであります。

二

大分話が小さくなりますが、さて斯くの如く言ふ時は、露骨に言ふと一向珍らしい事で無い、夫れ丈けの事なら疾うから聞いてると、直ぐに又思ふのである。「御一代聞書」の中にも、或人が蓮如上人に、彌陀を頼む一念の所にて往定は一定かと伺はれたら、傍に聞いて居られた他の御弟子が、「夫れなればいつもの事である、もつと何か珍らしい事をお尋ね仕なくては」と言つて、大層蓮如上人が御叱りなされたのである。我々も親様の親心と言へば、直ぐに又いつもの事のやうに思ふ故、何時迄たつても頂けぬのである。之に就き此頃或るお方

に話して、大層有難く喜ばせて貰うた事がある。其の方は兼ねてより佛法に心掛けの篤かつた方でありましたが、又其の息子さんが大層慈悲に熱心な方で、疾くより茲へも聴きにお出でになり、又時としては自分で日曜學校などさへやつて見る、といふ程の方である。丁度今より二三ヶ月前の事でありましたが、其の息子さんの所から電報が来て、親が危篤であるから直ぐ来て呉れとの御頼みで、私は早速往きて其の御親父の御病床でお話して來たのであつた。勿論其の方には一二度前にお目にかゝつた事もあり、兼ねて能く聴いて居られるのであるから、決定して居らるゝものゝ如くあつたのであります。果して其の時の話で安心せられたか、其後氣に懸つて居ながら、聞く事が出来無い。其後他で、不思議にも御病氣が直り、近頃は又胃腸病で困つて居られるとの事を聞いたのである。其の後其の方の御兄弟の方にお目にかゝり、段々御様子を聞いて見ると、あの時先生の御話聞いてから、非常に喜んで、もう他の方の話は聴かれぬ、是非先生の話を聞かんからぬと、御講話の有る日を指折り數へ待ち、身體が快くなつたら九段の御講話に行くことと楽しんで居たのであります。近頃は又餘病が出て行けぬ。處が平日は其の通りに喜び、又死にかけた時はあれ程迄に喜んだのであります。段々病氣が直ると共に様子が變つて仕舞ひ、近頃は少々熱でも出ると、イヤ瀑布より水と大騒ぎをし、兎角家の者に對しても無理が出て仕様が無い。傍から、もつと念佛が稱へられさうなものだと言ふと、そんな事は分つて居ると言ふ」と、斯ういふ話である。こんな聞きやうならば仕様が無い。之では往相の廻向

を頂いたのも何でも無いのである。

之は大分ぐい例を出したのでありますが、兎角御同様に此の事が常にあつてならぬのである。「夫れならばいつもの事である」「何かもつと珍らしい事でなければ」、或は「慈悲は分つて居るけれど、病氣は實際辛いでないか」と、之では慈悲が能く分つて居るのも何でも無い。此の間も京都に行き或る一人の方に話をすると、其の方はもうちゃんと安心をして居られる方であるが「久遠劫よりいまして流轉せる苦惱の舊里はすてがたく、いまだうまれざる安養の淨土はこひしからずさふらふこと、まことによく／＼煩惱の興盛にさふらふにこそ、なごりをしく／＼も婆の縁つきて、ちからなくして、をはるときに、かの土へはまゐるべきなり——私はいつやら斯く頂いたから」と言はれる。私は其言葉尻を捉へて、「其のいつやら頂いたから」の一言が悪い。彌々死ぬるとなると、彌々慈悲が有難くなるのでは無い。あなたと言葉に悪い處は無けれども、いつやらの一言で、佛の慈悲を役濟みのように爲て仕舞うて居る。此方が彌々仕て見やうの無い時に、大悲の親様は、汝生命が畢ると悲しんで居るも、茲に我が待つて居るぞ、此の世の事は苦しからうが、茲に我が待つて居るから心配は無いぞと、壁一重隔て、向うかう言ふて下さるのでは無い、此の仕て見やう無き私の上に、直さ／＼佛は斯く言つて下さるのである」とお話仕て來た事でありますが、之も矢張り同じ事なのである。「佛が助けて下さる事は能く分つて居る」「助けて下さるに違ひは無いが、實際が辛いでないか」などと言つて居るのは、まだ眞に遣る瀬無きあなた

のお心が頂けて居無いのである。

其處で前に戻りまして、私は其の親子さんの處に、再び出かけて行つた。先づ御兄弟の方に向ひて、「今迄御病人が頂いて居ると思つて居られたのは、實は本當に頂いて居られたのでは無い、實は自分で自分の心に然う思つて居られたのである。然う思つて居られたのが消えて仕舞ふたから、自然、あなたの者に同情を求め、思つて居るやうにならぬと無理を言はれるので、之は其の方に御無理が有るのでは無い。あなたは御兄弟の事を彼是れ言はれるが、あなたの仰しやる頂きやうなら、矢張りあなたも同じ事で無い。之はしつかりお頂きなさらぬといかぬ。皆様の處で御一緒に話すから、能くお聞きなさい」と申し、「皆んなが頂いて居る／＼と言ふのだが、つまるところ何處を頂いて居るのであるか。蓮如上人が、此の多人數の中に、極樂に往く者一人か二人がある可きかと仰せられたら、皆んなが肝を潰したとある。彌々と取り詰めた時には、皆んなは何處を頂くのか」と、他の人々にも嚴しく申し、夫れから御病床に行きますと、御本人はさも持ち切れぬといふ様で、心配さうに枕を膝にして待つてお出になり、「どうも待つて居りました。また此の通りの病氣で」と言はれる。私は初に「あなた今迄有難いと思つて居たのが、消えて仕舞ふたのでせう。あなたの心中は、立つても居ても居られぬ心持で、何ともかとも仕て見やうが無いのでせう。今死ぬと思ふと、何うにも斯うにも仕て見やうが無いのでせう。實に御尤です。私は此の間あなたのことを聞くなり、屹度茲であなたは苦しんで居られるものと思つて居ました」と言ひますと、「え、夫れが分りますか」

と言はれる。其處で私は「是れ程私が心を察し仕て言ふと、あなたは自分の病氣も忘れてお聞きになるのである。平日聴いてお出になる二河白道の指示が茲で無い。我れ今回も亦死せん、住るも亦死せん、去くも亦死せん、一種として死を免れず。我れ寧ろ此の道を尋ねて前に向ふて而も去かん。既に此の道有り、必ず應に度す可し。此の念を作す時、東の岸に忽ち人の勸る聲を聞く、仁者但決定して此の道を尋ねて行け、必ず死の難無けん、若し往らば即ち死せん」と。又西の岸の上に人有つて喚うて言はく、汝一心正念にして直に來れ、我れ能く汝を護らん、衆べて水火の難に墮せんことを畏れざれと。

火の河があり、水の河があり、行き場が無くて苦しからうが、此の親は皆な知つて居る。夫れを知つて此の親は其の者が哀れだと、茲に出て來たのである。汝の身の上の事は何もかも皆な此の親は知り抜いて居る、嘆苦しからう悲しからう。其の者を見捨てぬのは、此の親一人であるぞよ、心配するな案じるなと、私の心の底迄知り抜いて、言つて下さる此の遣る瀬なき親の仰せを頂くは今茲である」とお話申した。すると其の方は、フーッと感歎の聲を放ち、「私は今迄何を聞いて居たのか」と言はれる。私は「あなたの聞いて居られたのは、平日無事の時唯助けて下さる／＼と聞いて、病氣になつても又助かる位に思つて居られたから、彌々となつて駄目になつて仕舞うたのである。『歎異鈔』に、「佛かねて知し召して、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば」とある。佛かねて知し召して」とは、茲を知し召してでは無い。佛兼ねて知し召し

て」とは、私の此の仕様の無き、彌々となれば右にも左にも行けぬ茲を知し召し下されてである。あなたは平日自分でも之が分ら無つたのであるが、然るに大悲の親様は疾うから茲を見抜いて下され、我々が生死海中に居て、「回るも死せん、住るも知せん、去くも死せん、一種として死を免れず」此の何うにも仕て見やう無き我々の有様を御覽下されて、其の者が可哀相であると、現はれ下されたのである。我々、到底善くす可き事が出来ず、惡しき心は止まぬ、斯く仕度いとは思へども、思ひの通りには一つも出来ず、時來ればいやでも應ても死ななければならぬ、此の仕様の無き我々の身を兼ねてより御存知下され、其の者を助け度いとの御心が御本願のもとである。皆んながお頂きになる『御文』でも、超世の本願と御示し下され、諸佛に超え勝れたる大悲大願とあるは、何であるか。平日はうつかり頂いて居るのであるけれども、之は疎かに聞いて居てはならぬ。我々善い事をすれば助かり、惡止めればよいといふ事は、理屈では誰でも皆な知つて居るのである。そうして夫れが其の通り出来るならば、阿彌陀佛の本願は入らぬのである。善くならねばならぬと言ひつゝ、善く出来ず、惡止めねばならぬと思ひつゝ、惡が止められず、死なねばならぬと覺悟して居ても、死ぬのはいやなのが、我々の有様なのである。若しお互に突き當る事が無いならば、阿彌陀佛の御本願は入らぬ。我々が必ず茲に突き當ることを佛は兼ねて知し召し下され、其の者が何うしたならば助るか。當り前に戒行修行出来るならば、佛は御心配下さること無いのであるが、併しながら夫れが我々には出来ぬ。出来ぬから

楚に何うか仕なければならぬと、一切二劫三劫四劫、五劫の佛の御思惟は、此の私が其の惡しき奴なるが爲めである。佛の五劫の御思惟を、よそに眺めて居るには、何うしたならば助かるかと、此の私の罪をば佛兼ねて知ろし召し下され、此の者の爲めに御分別下されたのが五劫の御思惟なのである。而して其の結果佛と成る上は、此の善の出来ず惡の止められぬ人間、天に訴へ地に哭しても誰も相手に仕て呉れぬ此の者に、佛の廣大な力を加へ、我々の生命となり、親となり、友人となりて、此の者を助け我が境に迎へ、生れしめずば我も佛とは成らぬぞと呼んで下されたのが、佛の有難き仰せなのである。我々何とも思はぬに阿彌陀佛なる人が昔に現はれ、我々を助けて置いて下さるのであるなど、そんな事は無い。佛の姿全體が、私が此の免れるに道無い奴である爲めに、其の者が哀はれたとの遣る瀬無き心一つがもとになりて、現はれて下されたのである。而して其の御まことが御成就下された御姿が阿彌陀佛である」と、段々お話しして來た事でありませう。

茲の處は皆様に是非能く聞いて頂き度いのである。我々動もすると、佛なる方は我々の計られぬ大きな方で、助けて下さるは我々の目に見える一部分位に思ふ事があるのである。佛は如何にも盡十方無碍光如來、不可稱不可說不可思議の方であるが、夫れが外では無い。此の罪の私が可哀相に仕やうが無くて、御苦勞下され、此の者を飽迄見捨てぬとの遣る瀬無き御心の儘が、佛の本願、佛のお姿、佛の御呼聲なのである。であるから、お慈悲は佛の一部分では無い、全體まる／＼

が此の私を可哀相と思ふて下さる遣る瀬無き心なのである。而して其のお心から永劫の御苦勞下され、其の結果佛となりて現はれ下されたのである。而して其のお心を持ちて、既に十劫の長の間お待ち兼ね下され、まだ分らぬか／＼と言つて下さるのである。故に此の遣る瀬無き心頂けば、お慈悲のことは疾うから分つて居るなど、そんなこと言つて居られる話では無い。聞く度び毎に初つ事、聞けば聞く程不思議々々々、能くも／＼そのやうに思召し下され、四方八面塞がりの私に、斯く迄の廣大な親心を御差向け下さること、頂かせ貰ふ外は無ないのである。加威力とは、此の廣大な親心を常に私に御加へ下さる事なのである。親様の御心は須臾の間も私を離れて下さる事は無いのである。而も夫れが光がたゞ物を照らすといふ如き形容の話では無く、大悲の胸の中では常に遣る瀬無く／＼思召し下され、何故之が分らぬか、何故之が頂けぬかと、常に思ひ詰めに仕て居て下さるのであります。

三

さて是れ程の遣る瀬無き御思召と承はりながら、あゝ有難いと頂けぬのは何であるか。此方が罪業深重の落ちるより仕様の無い者と氣がつかぬからである。彌々佛の遣る瀬無き親心の聞えて下された一念は何うかと言へば此の罪深き私めをと、頂かせ貰ふ外は無いのである。毎度言ふ譬ではありますけれども、

奥山に枝折り／＼は誰がためぞ、親の身すてゝかへる子の

ため

といふ歌があつて、昔不孝な子供が有つて、自分の年老いた親を籠に入れて娘捨山に捨てに行つた。山路を掻き別けて奥へ／＼と捨てに行く道すがら、親は籠から手を出して、あたりの枝を打ち草を撓めて、道しるべをする。子供は之を見て、あゝ年をよつてもまだ歸つて呉る積りかと、内心親のする事を輕蔑しながら彌々峠に着き、さて親を捨て、歸らうとする。と、親は子供の袖を引き「一寸待て」と言はれる。「お前はもう歸るか、もう逢ふまいが、年若いお前が道筋に迷ふてはならぬと思つて、道すがら道しるべを仕て置いたから、間違へぬように歸れ」と言はれる。其の時、小供は今迄とても善い事してるとは思はぬも、此の親の一言を聞くなり「あゝ親のあの道しるべは此の私の爲めであつたか、夫れを自分は親が歸る爲めと思ひ、あとから／＼碎いて來たのであるが、思へば／＼勿體無い、親は夫程迄に此の自分の事を思つて居て下さるのであつたか」と、親の恵みが此の一念に徹して、あやまり／＼再び親の供して歸つたといふ話がある。佛の五劫思惟の御本願、兆載永劫の御苦勞、十劫以來の御待ち受け、夫れは佛の事であると、我々も人事のように見てゐるのであるが、此の私を離れて、佛のお慈悲が有るもので無い。世の中に眞のまことが、唯冷然と石の如くあることは無いのである。まことは不實の者を見れば見る程可哀相で、夫れが捨てられぬのが親の慈悲、眞のまことなのである。佛の五劫の思惟、永劫の修行、十劫以來の御待ち受けといふが外では無い。我々が斯く日々罪の生活を仕て居るばかりに、其の者を見そな

はし給ふ佛のお心遣る瀬無く、其の者を如何にもして助けると、御苦勞下された其の御苦勞の塊りが、五劫の思惟、永劫の修行、十劫以來の御待ち受けなのである『歎異抄』の中には、彌陀の五劫思惟の願を案するに、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそこばくの業をもちける身にありけるを助けんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。と。若干の業をもちける身にありけるを、助けんと覺し召したち下された、之れが佛の御親心なのである。斯く若干の業をもちける私、此の罪惡深重の此者を、助けんと御呼び懸け下さる御本願と頂けば、先きに申した「聞くと言ふは衆生佛願の生起本末を聞き疑心有ること無し、是を聞くと曰ふ」とある此の佛願の生起本末を聞くとあるか他では無い。此の私が悪いばかりに、佛は御苦勞下されたのである、もとはと言へば、此の私の悪いのが、佛の涙のもとである、といふ茲一つを頂いて、我が身の彌々罪の深い事の分つたのが、聞いたのである。往相の廻向と言へばとて、玉かなんぞ物を貰ふのとは違ふ。あゝ此の私一人の爲めに夫れ程長く親様に御心配かけたのであつたか、實に申譯が無い、親は夫れ迄に此の私を思つて居て下さるのであつたかと、其の廣大の親心を聞く一念に、眞底から我が身の罪の分つたのが、往相の廻向の頂けたのである。

私は常に言ふのでありますが、親鸞聖人の御教化は、薬を飲め病氣が助かるとの仰せては無い。汝の病氣は危篤であるぞ、もう迎も助からぬぞと御知らせ下され、其の者を見捨て

給はぬが南無阿彌陀佛の親様であるぞと、知らせ下されたのが、親鸞聖人の御教化なのである。處が斯く言ふと又其の言葉に附いて廻はりて、信仰を頂く前にもう自分は駄目と、覺悟が出来なければ慈悲は頂けぬのかと、苦勞する人があるのである。然うては無い、我々南無阿彌陀佛の最後の服の薬を頂く迄は、如くに自分で覺悟を附けようと思つても、覺悟を附ける事が出来ぬのである。もう仕様が無い助からぬと詮方なくて諦めたのは、覺悟を爲たのでは無い、實は嘴りついても生きて居度いのである。其の助かり度いも仕様が無いと苦しんで居る者に、其の仕様の無い者を助ける親は茲に居るぞよと、其の親様の御呼聲を聞く一念に、あゝ其の親様が此の私を助けて下さるのであつたか、今迄自分は何を聞いて居たのであるか、死ぬる仕やうが無いと苦しんで居た自分は、まことによく／＼煩惱の興盛にさふらふにこそである。此の罪深き身を斯く迄に御存知下され、斯く迄も御苦勞下され、呼び懸け給ふ佛の仰せてあつたか、あゝ有難や／＼南無阿彌陀佛々々」と、其の佛の親心の遣る瀬無きを頂く一念に心の底から安心が得させて貰へるのである。之が聞其名號信心歡喜乃至一念の一念なのである。其の遣る瀬無き御呼聲を聞く一念に、あゝ有難や／＼と、信心歡喜乃至一念である、手間暇取れる信心では無い。して其の一念に「至心に廻向したまへり」——此の一念が自分の方から起つたものと思ふて居ると、違ふ。此の一念が親様の方より至心に廻向して下されたのである。之れが親心が届いて下されたのである、遣る瀬無き親心が届きたればこそ、之れが頂けたのである。斯く

の如く頂いて我々涙を流して善ばせて貰ふ、其の喜ぶ姿を人より見て、立派な信心者などと言ふのであるけれども、自分より言へば、人より信心者など、唯し立てられて實に勿體無くて仕やうが無い。自分にしては今日初めて佛の長々の遣る瀬無きお心を知りて、あゝ淺間しや／＼と自分の心中を、あやまり果て、居る處なのである。佛の遣る瀬無き御仰せに夜が明けて、耻も人前も忘れて涙流して懺悔して居る處なのであります。

先日又私は或る御病人の方に話仕て來た事があります。其の人は癌の御病人である。平日は餘り人より氣が利いてるとは言はれざる、何れかと言へば、ごく無爲な、愚かなるが如く人に思はれて居た人である。處が彌々病氣が重くなり、親しき醫師の人が遠慮無く、聞いて置き度き事あれば、今の中に聞いて置けと言はれた。夫れて其夫なる人が私に來て呉れと言つてお出になつたのであります。で私は其の夫の方にも、先程申した御兄弟の人に話した如く話し、夫れより出かけて参り、又昨日も寄つて來たのであります。初めて行つた時は病苦の頂上であつたのであります。私がもう彌々死ぬるとなれば何も外に頼りとするものは無い、唯此の廣大の親様の御親心一つである、此の親様の待つて居て下さる事、是れ一つが實に有難くないか」と暫くお話すると、其の方はもう既に醫師よりいけなひと言ひ渡された時、兼ねて姑存命の時報恩講に連れられて参つた時の事今更胸に浮び、其時は有難いと喜んだのであるけれども、其後忘れ居たのであります。あゝの時間かせて貰ふたのは、此の親様の仰せてありましたかと喜ば

れる。其の方の言はれるには「待つて居るから来いよ、其の儘来いよ」と呼んで下さる仰せが今日迄分りませんでした、之を頂かぬばかりに今日迄淺間しき日暮致し、御恩を御恩とも思はず、あゝ一代淺間しき事ばかりでムりました。あゝ實に親様の仰せが有難い。何うか小供の時から御恩になつた御方にも、小供の時から事思ひ出し、廻心してると傳へて下され」と、言はれる。實に其方の言はる言葉其の儘が有難き佛の仰せてある。其の方の言はれる言葉聞いて居れば、私はじめ聴聞して居る者へ實に佛より直さ／＼の御言葉である。もう彌々死ぬるとなれば、佛より来いよ／＼と言つて下さる、来いよ／＼我能く汝を護らん、水火の二河に墮せんことを恐れされ、其の墮ちるより仕様の無い者を、斯く親は呼びかけ今日迄待つて居たのであるぞよと、茲に寶物が有るか之を遣るぞと言つて下さるのでは無い、其の墮ちるより仕様の無い者故夫を哀はれみて、茲に親が待ち居るのであるぞ、其の墮ちる汝を浮かめる爲め、茲に浮んで居る船であるぞと言つて下さるのである。其の仰せを聞く一念には、實に此の方の言はれる如く、今日迄之を頂かず、實に淺間しき日暮し仕て居りましたと、廻心懺悔の外は無いのである。善導大師は如何にお示し下されたかと言ふに

深心といふは、即ち深く信ずるの心なり。亦二種あり。一つには決定して、自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫より以來、常に没し常に流轉して、出離の縁有ること無しと深信す。

善導大師が決定深信とお示し下されたが茲である。佛は助け

て下さるけれども、我が身は悪い、我が身は悪いけれども、佛は助けて下さると、言つて居るのなら決定深信では無い。此の悪い墮るより仕やうの無い者を助けて下さる親様であつたかと、彌々突き詰めて聞く一念に、自身は現に罪惡生死の凡夫曠劫よりこのかた常に没し常に流轉して、出離の縁有ること無し身と、彌々我が身の悪い事が知れたのが決定深信である。又次には

二つには決定して、彼の阿彌陀佛の四十八願は、衆生を攝受して、疑ひ無く慮り無く、彼の願力に乗じて往生を得と深信す。

佛の本願は其墮ちるより仕やうの無い、生命の畢る其の者を助けると仰せ下さるのである。其の者が若し生れずば、此の佛は正覺は取らぬぞと御誓ひ下されたのである。此の遣る瀬無き親の心を、若し汝が受けぬならば佛の本願は所詮が無くなつて仕舞うぞよ、汝がまだ迷ふならば、此の我が心盡しは水泡になつて仕舞ふぞよと、仰せ下さるのである。常に申す御文なれども、『淨土論』の偈文には

佛の本願力を觀そなはずに、遇うて空しく過る者無し、能く速に功德の大寶海を満足せしむ。

此の廣大なる遣る瀬無き御本願力と聞いて見れば、信仰は少しも六かしい事では無い。

四

我々、信仰は實驗である、廻向であると、何か、そ外にあるやうに思ひ、其の實驗廻向を自分も味はつて見度いと此方

から力んでかゝる故、何時迄もお慈悲の外に居る氣持がし親のお慈悲が頂けぬのであるけれども、此のお慈悲に洩れる者は、十方法界一人も無い。親様の其の遣る瀬無きお心は、私共一人々々と向つて下されるのであり、其の長の御苦勞は私一人が爲め仕て下されてあるのである。而して斯く私共一人々々を思つて下される親のお慈悲は、念々刻々に私の胸に迫つて下され、あゝ如何にも斯る誓願の御不思議であつたかと、初めて私の氣のついた時、あゝ長い間悪い者を助けて下さるゝと聞いて居たのであるが、此の仕様の無い、誰一人相手にして呉れる者の無い私を、夫れを見捨てず益々可哀相と言つて下さる親様であつたかと頂かせて貰へるのである。此方からこんな心が起りますと言へば、其の爲め起した本願ぢやと言つて下され、こんな事もありまうと言へば、あゝ夫れも有る筈ぢやと、何言つても親様の方より先き此方の心を承知の上で、私を可哀いと言つて下さる、此の事聞けば實に初つ事ぢや。佛とは實に此のお慈悲の方にましませしか、之で無くては安心はさせて貰へぬ、之ありてこそ人生に平和の源來たり、之ありてこそ人間無量壽の源來ると、實に有難く喜ばせて貰へるのである。今迄は之を頂かずに、人が悪い誰が悪いと、人事にのみ彼是れ氣を取られ、横さまにのみ暮して居たのであるが、此の待ち兼ねるとの親の仰せ頂いて見れば、一人も空しく過る者は無い。

本願力にあひねれば、空しくするひとを無き、功徳の寶海みち／＼て、煩惱の濁水へだてなし。如何なる強剛難化の者も、此の大悲にもう遇ふと、皆な參つ

て仕舞うのである。

先日も或る方が私に「君は火のやうな人だ、人に一度あつ」と言はさるや措かぬと言はれたが、此の信仰の事はかりは、一度あつと言はぬことにはいかぬのである。此の遣る瀬無き親のお慈悲に出會うて見ると、今迄右よ左よと言つて居た者が、あゝ斯く迄も思召し下される親のお慈悲かと、先き程言ふ嫉捨山の譬へである。親の道しるべは此の親捨てる自分の爲めなりしかと、親の言葉に初めて親のお慈悲が分つた時は、實に不思議と言ふは之が不可思議、餘りの不思議で言葉も出ぬのが不思議である。あゝよく／＼此の親不孝の私にお呆れなさらず、今迄御辛棒下されたは、實に此の親不孝の私一人が爲めてふりましたかと、初めて親のお心の頂けたのが「彌陀の誓願不思議に助けられ參らせて、往生をとぐるなりと信じて、念佛まうさんと思ひ立つ」其の一念である。而して此の一念が實に初めの了り、信の一念が一代に二度も三度も有るのでは無い。同じく『歎異抄』の中には、

一向専修のひとにあきては、廻心といふことは、たゞひとたびあるべし。その廻心とは日ごろ本願他力眞宗をしらざるひと、彌陀の智慧をたまはりて、日ごろのこゝろにては往生かなうべからずとおもひて、もとのこゝろをひきかへて、本願をたのみまゐらするをこそ廻心とはまうしきふらへ。云云。

今迄形有る佛を見度かつたり、色々と理窟が言ひ度かつたり、恰も或る物を卒業するかのやうに思ひ、又からりと分つたからよからうなど、お慈悲を悟りかなんどのやうに求めて居た

のであるが、今迄何處を捜して居たのであるか、此の私が悪るいはつかりに、之を助ける爲め現はれて下された廣大のお姿にてましませしと、之れ一つを頂くと之れ一つ頂く一念に、長々の親様の御苦勞を、此の一念に其の一部分を頂くのでは無い、すつかり一邊に貰うて仕舞ふのである。能く我々は佛のお慈悲が／＼分りかけましたなど言ふ。／＼分るお慈悲などが有るものでは無い。そんな助りやうなら、丸て夢のやうな助りやうである。佛のお慈悲は一邊に分らせて貰ふのである。親の方では五劫永劫長々待ち兼ねて下されたお慈悲であるけれども、我々之を頂くは、此の廣大なお慈悲に氣のつく一念に、恰も火の着いたやうに「あゝ成程此自分の爲めに夫れ程の御心配をかけたのであつたか、有難い」と、一邊にあなたの親心の有り切りを残らず頂いて仕舞ふのである。斯く頂くと親様の方では「あゝ五劫永劫長々の苦勞も、皆な之れ一つを汝に届け度い爲であつた、彌々之が分つたか、もう之で我が心配も無くなつた、肩の重荷を下した」と喜んで下さるのである。初めにも申したのでありますが、兎角我々は佛を偉大に考へるの餘り、お助けは我々の目に見える光つた先きの方で、之から奥の方が段々に分るのだなどと思ひ易いのである。佛の五劫の思惟永劫の修行と言ふも、つまり此の我々が罪が深いばかりに、之れを助け度いばかりの御親心に外ならぬのである。淨土と言ふも此の私を迎へるばかりにお作り下されたのに外ならぬ。斯く私の行き場の無い事を哀れみて、既に淨土迄御用意下されての御呼びかけと頂くと、實に他力も他力、此の以上の他力は無い。善導大師は「玄義

分』の中にお示し下されて曰く

四十八願一々願じて曰く、若し我佛を得んに、十方の衆生、我が名號を稱して我が國に生れんと願せん、下十念に至るまで若し生れずば正覺を取らじと。云云。

一々の願一々の事、悉く此の私を助けようとのお慈悲の塊りに外ならぬ。而して斯くして我を御待ち下さる事、親の方では實に十年二十年のことで無き、無量永劫の長の間御苦勞の仕詰めに仕て下さればこそ、遂に此の私の胸の中に其の廣大の御念力が届いて下さるのである。而して其の届く一念に其の長々御苦勞のおまことをすつかり一邊に頂く。信心歡喜の一念に、有る丈の親心を一邊に至心に廻向して下さるのであります。『和讃』には宣く、

五濁惡世の有情の、選擇本願信すれば、

不可稱不可説不可思議の、功徳は行者の身にみたり。

さて斯く親のまことを信の一念に頂いて、何ともかとも言ひやう無く「あゝ長々の間お待たせ致しました、南無阿彌陀佛々々々」と喜ぶと、此者を親の方では如何に思召し下さるか。人間にしても何うか此の我心を向うに届け度いと思ふて居るのに、さらに届かず、向うが理解して呉れぬ。あゝ何うも仕方が無いと待ち兼ねて居る矢先きに、向うに理解されて、「あゝ長々心配かけて済ま無つた、今迄は分りて居りませぬでした」と向うから一言言はれる。其の一言聞いた時は、言つて居る人よりも言はれた此方の方が何の位嬉しいか知れぬ。あゝそうさへなれば實に自分は満足である、此方の念力さへ届けば、分つて喜ぶ君よりも、自分の方が何程喜ばしいか知

れぬ」となる。人間にしても然うである。況して五劫の思惟永劫の修行は何の爲か、六度萬行は誰の爲め、娑婆往來八千度は何の爲めか。實に五濁惡世の我等が迷うて居る爲め、夫れを助け度いばかりに種々の御苦勞下されたのである。三世の諸佛如來が、今日迄種々に此の世に出現して下されたも、此の阿彌陀佛不可思議願を説かんとより外は無い。『正信偈』の中には

如來世に與出したまふゆへは、たゞ彌陀の本願海を説かんとなり。五濁惡世の群生海、應に如來如實の言を信すべし。釋尊初め三世の諸如來が出現して下されたも、此の親のお慈悲一つをお知らせ下さらんが爲めである。もう茲になれば、此の親のまことが分るか否かである。茲一つが分れば其の一念に親は此の上なく大満足して下され、此の者を攝取不捨の光明中に納め取つて下さる。『行卷』には、

十方群生海、此の行言に歸命したてまつれば、攝取して捨てたまはず、かるが故に阿彌陀佛と名けたてまつる。之を他力と曰ふ。茲を以て龍樹大師は即時入必定といへり。曇鸞大師は入正定聚之教とのたまへり。仰いて斯れを憑む可し、専ら之を行すべき也。

攝取不捨といふは茲である。「念佛申さんと思ひ立つ心の起る時、攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり」とあるが茲である。其の一念に大悲の親様は「あゝ彌々之が分りて呉れたか、長い間待つて居たは茲であるぞ、とうとう其の時が來たか」と喜んで下さる。『和讃』に

若不生者のちかひゆへ、

信樂まことに時いたり、

一念慶喜するひとは、往生かならずさだまりぬ。時の到りたは放つて置いて偶然に至つたのでは無い。若生者不取正覺と、一時一刻も私を離れず念じて下さる此のお誓ひが居て下さるからである。念々刻々其の遣る瀬無き心より、前後左右から種々に方便して、私を其處に追ひ込んで下さるからである。又『和讃』には、

釋迦彌陀は慈悲の父母、

種々に善巧方便し、

われらが無上の信心を、

發起せしめたまひけり。

其の届く一念に、親様は深く喜びましゝて、光明偏照十方世界念佛衆生攝取不捨と光明中に收め取り下され、眞の佛弟子、妙好人、希有人、眞の親心の頂けた眞の佛の子として下さるのである。又諸佛菩薩は斯くてこそ我が勝友であると御賞め下さる。『觀經』の了りには

念佛する者は當に知るべし、是れ人中の分陀利華なり。觀

世音菩薩、大勢至菩薩其の勝友と爲りたまふ。

と示し下されてある。斯くの如く頂くと、もう此の上にす

べき事は他力の教に於ては一つも無い。

彌陀大悲の誓願を、

ふかく信ぜんひとはみな、

ねてもさめてもへだてなく、南無阿彌陀佛をととなふべし。

斯く信心決定の上は、往生の一大事は佛に任せ参らせ、寢ても醒めても隔て無く、念佛稱へさせて頂く外はないのであります。

さて斯くの如く段々頂くと、私初じめ動ともすれば、いや實驗ぢや廻向ぢやと、此の方の頂く方には、かゝり氣をつけて自分に縁の近い人に對しても、頂ける時には頂けるだらう位に

思うて居るのであるが、實に是程迄に佛は思うて下さると知らせて貰うて見れば、之は何うしてとも有縁の人々には知らせなくてはならぬ。『和讃』には

佛慈功德をほめしめて、

十方の有縁にきかしめん、

信心すてにえんひとは、

つねに佛恩報ずべし。

他力の信をえんひとは、

佛恩報ぜんためにとて、

如來二種の廻向を、

十方にひとしくひろむべし。

信仰は六かしい、容易で無いと、放つて置いては相すまぬ。六かしいのは、初めにも申した如くて、往相の廻向に由らぬからなのである。今此の遣る瀬無き大悲のお心を聞かせて貰うて見ると、實に十即十生百即百生、此の大悲に洩れる者は一人も無いのである。遇ひ難いと打棄つて仕舞うから、廣大の御慈悲を空しく仕て仕舞ふのである。『正信偈』の中には宣はく、

彌陀佛本願念佛は、邪見憍慢の惡衆生、信樂受持すること、甚だ以て難し、難中の難斯れに過ぎたるは無し。

遇はれぬのは此方が邪見憍慢なから、遇はれぬのである。如何なる者でも、此の御慈悲頂く時は、實に斯る大惡人を、如何なれば親は夫程に思召し下さるか、項折れて頂かせて貰ふのである。往相の廻向といふは、實に茲の味ひ、此の遣る瀬無き御念力の到り届いて下されて、項の折れる處なのである。和讃には

往相の廻向とくことは、

彌陀の方便ときいたり、

悲願の信行をしむれば、

生死すなはち涅槃なり。

時到り頭の折れる其の一念に、佛の方よりは、

金剛堅固の信心の、

彌陀の心光攝護して、

さだまるときをまちえてぞ、

佛は深く喜びましゝて、

ながく生死をへだてける。

又十方恒沙の諸佛も、我が本懷とお喜び下され證誠護念して下さる。又天神地祇諸の眞衆達迄、大満足でお迎え下され、其の者を百重千重お護りたて下さる。實に腹一杯のお慈悲を頂いて、感謝の涙溢れ、南無阿彌陀佛々々と、お念佛喜ばせて頂く外は無いのであります。今日は『如來の加威力』の題下に、如來廻向の遣る瀬なき御親心を喜ばせて頂いた次第であります。(五月二十八日)



告白

お待ち兼ねとは自分のことであつた。

小林 しづ

私の信仰の告白を致します。先日先生が告白を書くやうにと仰せられました時、私のやうなものには、とても思ふことを十分書きつづることが出来かねますので、御断を致しました。が、尙御すゝめもあります。又竹原様も善智識の仰なら、道宗近江の湖を一人してうめよといはれても、畏りましたとお受をせねばならぬのであるから、やはり書かねばならぬと仰せられます。それに佛法讃嘆とあらん時は、いかにも心中をのこさず、あひたがひに信不信の談合申へきこととなりと善智識の仰せられたこともかねて、聞き及んで居りますので、かた／＼無學をも省みず、書くことに致しました。少しなりとも皆様の御参考になりますふしもありました誠に幸に存じます。

私の里は極めて御法儀を喜ぶ家で、寺親類もあります。下女下男たちにもそれ／＼代り合つてお説教へ参るやうにすゝめるとにしてありました。それで私は幼き時より御佛を禮拜し、六七歳の頃より地獄のお話などよくいひきかされたものであ

ります。十二三歳の頃には三世因果の道理もきかされて、家中のものが集つては法の話がありますと、いつも御法は若い時に聴聞致して置かねと何時、どのやうなことがあるかも知れぬと申しさかされ、その心の付きまするにつれて、お話をきくことも熱心になり、どうか御安心が戴きたいと思ひました。其中両親が續いて此世を去りまして、私は十六歳の時小林へ縁付きましたが、二十二歳の時夫がなくなり、間もなく同じき年に父もなくなりまして、此世の無常人生のあてにならぬことも経験致し、誠にかなしい思ひ致しました。けれども私は誠に強情者にて、未だ御慈悲を戴くことが出来ませんでした。

其後色々な憂い事つらいことも経験致し、此世のせち辛い有様も身にしみて感じたこともありましたが、けれど未だ御慈悲に眼が付かず、年月はいつしか流れて昨が東京で勉強することになり、私も上京致しました。かくて子供の守を致して居ります間にも、常に御法のことには心にかゝつては居りましたが、浮世の雑事にさへさらされて、聴聞の機を得ませんでした。ところが昨が中學を卒業致しますと非常な大病にかゝり、すでに命もあやふき場合に立至り、今更のやうに驚きまして、どうか御法が聞きたい、御法儀のある御方に出會ひたいと思ひましたけれど、思ふばかりで一向駄目でありました。キリスト教の熱心な信者の御方には幾人も知合がありまして、おすゝめになるまゝにキリスト教の説教も聞いたこともあります。其中昨のお醫者が折々佛教のお話を遊ばしますので、色々御話を伺ひましたところ、要するに此世で慈悲善

根を致せば、死んでも復たよき人に生れる、信ずる一念に彌陀同體の悟を開くといふことにはない、此世で成る可く他をあはれみ親切をしてやればよいと申されます。それも一理あることゝは思ひました。けれどまだ安心が出来ませぬ。これまでとても誠に／＼罪障の深いもの、此凡ともいくら氣を付けても、人様に不實もないとも限られぬし、此凡夫に到底慈悲善根などはし了せられぬと思ひました。それに國の姉からは常に早く御法をきけ、これが一大事であると申して参ります。そんなことはよく承知致して居る、うるさいと思ふこともある位、手紙の都度注意してよこしました。かく致しまする中に昨の病氣も幸に全快致しまして、目的の學校へ入學が叶ふことになりました。其方は一と先安心致しましたが、心にかゝるは未來のことです。けれどまだ一生懸命といふ程にはなりません。ところが近年東京近郊が大分物騒で、方々にとんだ災難にあふ人がある様子を、新聞で見もし話にも聞きますので、私も田舎に住つて居り、ことに昨と二人きりのことでありますから、これはこうしては居られぬ、何時どのやうなことがあるかも知れぬ、是非とも未來の安心を定めて置かねばならぬ、もうどうしても／＼して居ることは出来ぬ、早く御法がききたいと、是迄のやうに只きいた／＼の思ひで、日々の用事に追はるゝまゝに、のび／＼にすることは出来ず、今度こそは只きいたてはない、どうしても聞かねばならぬと思ひまして、このことを昨に話しましたら、昨が學校に徳風會といふのがある、佛教を旨とした會合で、他力の御本願に熱心な近角先生といふ御方の御話が

あるから、友達に頼んで先生の御話を伺ひに行くやうにして貰つてやらうと申しますので、私はそれはいいことをきいた、どうかさう致してくれと申しました。すると御友達は早速御頼み下さつて、鈴木さんと淺野さんと申す二人の御友達の御紹介で、昨年の十月の末に徳風會の座談會の晩に、求道學舎で近角先生に御目に懸り、會が丁りましてから一時間ばかり御話を伺ひ、尙日曜毎の御講話に出席するやう御話がありましたので、十一月から缺かさぬやうにと、日曜日毎の御講話を伺ひました。小さい時よりかね／＼御法は若い間にきかねば、年がよつてはなか／＼きかね、わかき時佛法はたしなめ、としよれば、行歩もかなはずねむたくもあるなり、たゞわかきときたしなめと、佛法者の申されしよしも承つて居りますによつてこれまで、聞きたいといふ念はあつても、一生懸命にならず、只聞きたい／＼といふ思ひで今迄過したことがはづかしく、今度こそはと思ひまして一生懸命に日曜を樂みに参りました。御法に饑えて居りましたので、先生の御講話を伺ふ度毎に、有難くて／＼なりませぬ、すると又自分の胸に参られるかとたづねます、まだ駄目／＼と返事をする氣が致しません、今度こそはと思つて家を出ます、歸りには又どうかと胸に相談致します、矢張駄目であります、かくして昨年はくれてしまひました。

新しく四十四年を迎へました。今年は元日が日曜日でありまして、昨は私が元日早々より結構な御話を聞かして戴くの、誠に有難いのである、仕合なことであると申しますので、私も成程さうである、それにつけても早く安心さして戴きた

いと思うて居ました。かくて八日の日曜、十五日の日曜と過ぎましたが、十六日の晩に、倅が淺野君が君の御母様はよくお参りになるねといはれたと申しますから、私はそれでは淺野さんも日曜毎には参りになるのかな、自分は何時も一生懸命聴かうと思うて前へ出るの、後の方にはどなたが御居てになるやら少しも知らぬ、それは誠にすまぬことであつた、御挨拶もしないので、さぞ不實者と思召すことであらう、どうかよく御断を申上げてくれと倅に申しました。それからもうやすまう、今夜も御念佛諸共やすむことじやと、獨言を申しながら床に入りました。念佛の廣大なことは小さい時より聞いても居りますし、それに求道學舎からの歸りに竹原様からも道すがら御話を伺ひ、念佛の功德を説いて御聞かせに預つたこともありすので、行住座臥稱名致して居ります。かく致して行火へ足をのべ、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と五分間ばかりも念佛をいたしまして、あゝ勿體ないことではある、此廣大な念佛を足のべ乍ら、唱へるとは實に勿體ないことである、自分のやうなものに、行をして來いと仰せられたら、とても出来ぬことであるが、自分のやうな根機に相應の御法とは、何といふ有難いことじやらう、あゝ勿體ない、この何ともして見やうもない者を、阿彌陀様は遠から御待兼といふことを今迄何と聞いたらうか、人のことではない、自分のことであつたと、思ひますと同時に、胸の中はつとひらけ、さながら雲霧がはれて光明が現はれたやうに心地すがすがしく、只有難さ勿體なさ嬉しさに、夢中に起上りまして胸に手を置きまして、只南無阿彌陀佛——と稱名

致しました。

盡十方の無碍光は、無明のやみをてらしつゝ、一念歡喜する人を、必ず滅度に至らしむ。

月かげのいたるぬ里はなけれども

ながむる人の心にそすむ

あゝ實にさうであつた、自分は是迄いつも自分の胸の中をかへりみ、まだ駄目——と思つて居たが、さうではない、自分の眼の向け方が違つて居たのである、如來様の御慈光は遠くの昔に自分をてらしてゐるのに、自分は更にそれを眺むることをしなかつたのであるわい。

煩惱に眼さへられて、攝取の光明見されども、

大悲ものうきことなくて、常に我身をてらすなり。

實にこの通りであつた、今夜こそは自分は攝取の光明にあはして戴いたのである、あゝ有難い——と涙にむせて感謝致しました。それより床を出まして御佛前へ御燈を上げて禮拜致し、其夜は一睡も致しませず、先生の御講話を思ひ浮べまして、五劫兆載永劫の御苦勞は偏に我等一切衆生の爲と仰せられ、自分如き者の根機に相應の御法と仰せられたが、若い時よりこのことは幾度となく聞いたことではあるが、自分の愚さは輕々しく聞流して居た、實に勿體ない、あさましいはづかしいことであつたと、あやまり入りました、この誹謗正法のもの、罪業深重のこのやつを、久遠劫より御待兼であつた其御慈悲を戴かしてもらひ、氣附かしてもらつて見ますれば、其歡地は實に何とも彼とも申されませぬ。

うれしさを昔はそてにつくみけり

今宵は身にもあまりぬるかな
これ迄とんと思ひ出したこともないこの御歌さへ思ひ浮びまして、あゝ今夜といふ今夜は、どうした嬉しい有難い夜ではある、本當に身にもあまるうれしさは、何とも彼ともいひきれぬわいと返す——喜びました。

夜が明けましてこのことを倅にも話し、倅が學校へ参りますので一緒に出まして、先生の許へ御禮に伺ひまして、前夜の次第を御話致しましたら、先生も御喜び下され、尙之をよめと仰せられて歎異鈔をお貸し下されました。

此上は此夜のことを深く心に銘して、益々稱名相續して、御恩報謝を心懸けて居ります。南無阿彌陀佛——。

如來様の御直言

山 名 花

明治四十三年八月十六日、うらなつかしき長府をあとに、いよゝ決心して上京した。あゝいかなる前世の惡果なるや、幼きときより両親にはなれ、やさしき兄を唯一の親とも頼み人となり、もの心つきてよりは世の中の不幸なる人を見ては、實に可哀そうて忘れなかつた。不幸の境遇になやめる人の爲には、犠牲とならんと共に誓ひし我半身たる夫は、其期いまだいたらざるに、國家の犠牲となりはてし未亡片身なるぞ。煩悶苦痛は朝な夕なに去る事なく、可愛子一人を教育して此世を果るは本意ならず、未だ何一つなすこともなく、扶助を

受ける事の心苦しく、此愛兒なくば慈善界に投身して居るて有らうふと思つた。近しい人に相談しても私の思ふ事は何一つ成立しない、苦悶を重ねる斗りか、自分はこれほど人に盡しても、人は皆不實と思ひ、人の薄情なるに不満で有つた。末々のそみな身、死せんかといく度か思つたなれど、未來暗黒と愛兒の可愛さね、また心をとり直し、愛兒の希望通り上京して見よう、そしたなら煩悶も薄らぐて有ふと、兄にも相談して古里をあとにして、途に湯ヶ原に遊んだ。この湯ヶ原とて、肉體以上精神までもいろ／＼の煩悶より決してのがるゝ事が出来ない。

九月八日、水害に逢ふて目前旅館などの、寸時に流失する有様、言語にたへたる悲惨なるもので、私の宿は幸に高地なりしゆへ、無難なるも、下より避難者の登り来る有様、若きは老たる人を助け、小兒を背負ふてあたからぬれぬづみになつて居る。其時私の思ひうかべたは、實に此の世の中はあてにならぬ、あす有と思ふ心のあだ櫻のうたの如く、又風前の燈火の如く、死の宣告は眼のあたりせまつて居る、いまにも來たら何としよう、我身の一大事なりと切に感じました。一生はたゞ喰ふと着る斗り、肉體の爲にあくせくしに來たのではあるまい。精神を第一に安心立命しないと、まさかるときには必ずうろたへなければならぬ、一時も片時もはやく、死する事なき變る事なき、救の光明が見出したい、接したいと切に思つた。東京に來ても家を持ち、子供を學校へやるに付て苦心しました。其時私は世話になりても心あきなき人の同情によりたいと思つたなれど、とても駄目——慰安は求めら

れぬ。この人間世界では夫婦でも心がおけるに、たゞ／＼清い生活がして見たい。

十月二十四日 午後、あすは追分、南條先生の御説教が有ると、半月も前から待て居た。是非／＼参て聞きたい、この煩悶より逃れたい、思ふて見れば見るほど、取柄のない、とても親にも子にも御はなしの出来ぬ悪い私が何として佛様の御救が得られう、駄目々々、どしたらよからふか、苦痛で堪へきれない、我身ながら我心にあいそがつきたの。

二十五日 今日こそは／＼、たとひ御救をうけ得ずとも、是非一生懸命見て見よと思ふて参つた。この私のよをなものはとても外の道でよいものになれそうにない、はやく聞たい、けふこそ、いまこそと待受た南條様の御顔を拜して驚きました。私は大阪の女學校に居る時、別院で一度御講演を拜聴しました時は御若くて、いまは御ひげも白くならせられしに、人はかく迄變るものか、私もかくやらんと胸をつかれました。心を矢たけにはやらして、待遠く思ひましたに、眞剣に聞ふと思ふと、なほ氣がほつとなる様で、私にはよく分らぬ様に感じました。これではならぬ、一大事、いま聞かのがして、またいつきかろうと思ふ中「此の御席の皆々はけふは何と思はるゝ、あだかも祖師聖人の報恩講、極樂淨土より御出現まし／＼て、澤山御参詣の中に一人なりとも、わが供して來て呉れよと仰せらるゝ、久遠劫より御待兼の如來様の廣大なる御慈悲の御心には目をつけず、とてもこれでは／＼と自分の機ばかり詠めて居る人はないか、御慈悲に心がつかなければ、百年たつても駄目である、生々世々長い間うろ／＼し

て居るものを見をなはし、祖師聖人は御泣き遊す、悪いものあればこそ御本願御助け、今までの自分と云ふ心は今より捨てよ、我あるとおもへばこそ、我事を氣にせにやならぬ、如來様御心をすつかり御廻向下さるを、はいとまむきになつて、いたゞくのである」と申されました。

これこそ私に如來様の御直言、はつと思ふた其刹那、はや私は何とも申上様がない、大悲の慈光にとろかされて、身も心も狂はん斗り、生々世々の初事に、迷ひの夢が覺めました。この崇高き慈悲の御塊りの御親御なつかしいと思はず、苦悶千尋の淵に沈んでも、未だ自分と自分を思ひ、他力／＼と申しながら、自力でもかいて見ようと、足元ばかり氣にして、進む事も、退く事も出来ない、いつの世からかの立ちん坊の迷子で有つた、近眼であつた、目くらで有た、ほんにあきれました、今こそは／＼如來様の御直言を慥に聞きました、慈悲圓滿の御姿を仰き見ました、いや見させて頂きました、那落の底のたちん坊が、慈悲の絶頂よりたれさせ給ふ御救ひのつなひしとまかれしました。

南條様の御説教とは、どうしても思はれませぬ、私一人にわざ／＼如來様の御使なるか、あゝ難有とも嬉しいとも申様がない、此汚れた口で申さんか、筆でかくも勿體ない、長い間御佛様を何と思ふて居ましたでしよ、この罪惡の私ゆへに、いく度か御現れ下され、絶對他力ぞ、遠慮するなの御心が、今日まで分らなかつた、今日こそは私一人御供させて頂く身とさしてもらひました、涙はこぼれておさらません。人目も耻も忘れてしまひましたの、人は狂人と思ふたかもしれませぬが、私は狂ふほど嬉しいやら、すまぬやら夢中で歸りました。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

せぬが、私は狂ふほど嬉しいやら、すまぬやら夢中で歸りました。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

それから角谷様の御引合せて、近角先生の求道學舎へ参らして、いたゞく事になりました。燈臺下くらしして、一丁もなき處に居ても、こんな結構な處のある事が少しも分らず、御法にあこがれて居ましたに、はからずも、しらせて頂いた、これも御佛様の御引合せ、善智識にせよとの御勅命なるかと嬉しく、其足で歸りがけに求道學舎をさがしておきました。

次の日曜待兼て参らして、いたゞきました。御講話のなかに／＼私への御意見と嬉しく聞かしていたゞきました。あまり私は嬉しいので、人様もこんなにあるかと、先生へも御尋しました處、やはりそんな方もあると申され、一層嬉しく、あゝこの罪惡の私が生れ變らしていたゞいたのです。南無阿彌陀佛々々々。

次の日曜待兼て参らして頂きました、御講話のなかに「汝一心正念にして直に來れ、我れよく汝を守らん」と申されました。私は實に其時は非常に嬉しく、こんな嬉しい事は始めて聞きし如く感じました。花や、たゞちにこよ、目をふるな、足元を見るな、罪惡の身はとくより、承知して居ると、如來様が仰せらるゝ、花はハイと申て参ります、實に／＼勿體ない、親様なればこそ、こんなきたない、五慾の身をお正客とは難有や、南無阿彌陀佛。

十一月二十五日より、風邪にて打伏しました。日頃より煩惱にさへられぬゆへ喜ばしていたゞいたなれど、求道學舎に参られぬゆへ、いま頃は御話のある最中であらふと、心は参

つて居ました。

十二月四日には、今日は大分氣分もよい、あすはおさられよう、御佛さまにもうつくしくなつて、御禮をしよふ、今晚は晝もやすんだゆへ、あく迄も御恩を喜ばしていたゞかふと思ふて、あをにやすみかけたが、又西の方に、向て手を合せて、御念佛をと／＼さしてもらひました。眠りたとも思はぬに、誠に／＼不思議にも、西方幾百里なるやをしらず、廣大なる公園の様に、電氣の如き光あり、其中に私一遍御念佛申上れば、一對の御佛様、上より下まで白衣にて西の方にむかひ入らせらる、實に／＼廣大、なかに無數の御佛様勿體無いとも何とも申上様なきとおもひ居る中、ふとさめました。其間僅か二十分位の間にした。

後に私は、御佛様の御顔を拜む事出来なかつたのは、汝一心正念にして直に來れと、仰せらるゝ通り、私にかくの如くと、御見せ下されたのか、夢にしても難有いと、氣づきまして、一層御恩を喜ばしていたゞきます。世間の人が常に夢にでもと申しますが、私も夢に迄も見させていたゞいて嬉しい。(以上山名氏の日記を拜借して抄録しました)



雜 錄

人世の意義は信仰に 在り

(前橋監獄に於て講演)

近 角 常 觀

只今、山崎教誨師殿より御紹介になりました通り、私は近角常觀であります。此度不思議の宿縁により、皆様と親しく御目に懸り、一席の講話を致す事と相成りましたのは、私にとりまして、深く感謝致します。さて此中には今迄のうちに親しく遇ふて話致した人もありましよう、又私の書きました書物によりて知てをる人もありましよう、のみならず皆様は平日より山崎教誨師殿を初とし他の教誨師方より親しく御佛の教を聞きて信じて居らるる人々なれば、皆さんと私とは、直接間接に知りあひの人と思ふ。只今私が佛前にて御禮をあげつ、考ふるに、私は此の教誨堂は此度が始めてなれども、山崎教誨師様は十年前、こちらの教誨師をいたして居られたとき、私の書きました『信仰の餘瀝』を讀み、其第一章の宗教的同胞と云ふ章を深く味ひ、信心開發の時到了る由、豫て承りてをりました。又今より五年前、上田典獄殿が大分に御いてのと

の『信仰の餘瀝』は、私が西洋に居る時、私の信仰を發表せんが爲に出版せるものでありまして、山崎様は之を御讀みになつて感ぜられたのであります。勿論、山崎様は其時より其信仰の有様を皆様にも御話された事であらうと思ふけれども、今は重ねて此『信仰の餘瀝』の第一章宗教的同胞と云ふ事について御話申す。先にも申せし如く此章は、山崎様の信心開發せる處にして、又私の信心を告白する處なれば、此經歷を話せば此書を讀む人の參考にもなり、又今後讀まんとする人にとりても讀む上に都合よからんと思ふ故に、私の信仰の實際の經驗を御話ませう。

先づ私は、初より念佛を稱へる宗學の研究を致して知つてをる、尙其上、倫理道德の理想とする處のものを以て日常生活の基本となして日々暮してをりました。其時の心もちは、人間は古聖賢の如く、惡を去り善につき、人に對して同情あり、他人に對して不満足の念を挾まず、正直に暮すが道德上の理想である。即ち日常の生活上、人に對し自分の勝手をせざるのみならず、萬一にも他人が怨み心を以て吾に向ひ來れば、吾より一層同情をかけてゆく様にすれば、如何なる人もよく吾に従はざることなしと、此れが私の信仰前の根本主義でありました。宗教には「敵を愛せよ」此れは高尚なることである。人と争へば負けるが即ち勝ち、譲るのが即ち勝なりと思ふて居つた。私のみならず、多くの人々の中には私もさう思ふと云ふ人もあらん。私が此心を以て居るうちには別に不安の念なかりしが、此心得にてだんだん進んで行くに従て勞苦は自分が致し、人に對しては自分を犠牲にする様にやりました。

き、私は親しく御話を申上げ、同時に山崎教誨師殿にも初めて遇ひ、爾來、山崎教誨師殿には此難有御法を皆様に傳へて居られた、其後數年を経て山崎様はこちらへ御いでになりて、同じく御佛の御慈悲を傳へてをられます様な次第なるが、茲に不圖も御縁ありて山崎様の御紹介により、上田典獄殿の御招を受けたるは、實に不思議の御縁と思ふが、こゝには深き人世の意義が横つてをるのである。私共は只表面に顯はるゝ眼前の事にしか氣がつかぬが、大悲の御佛は、吾々一人、一人に、御佛の御慈悲をとゞける爲に御心配被下るのである。茲に吾々は、御佛の廣大なる御慈悲が感ぜられる。如斯御佛が遠き昔より吾等を憐み給ふ、廣大なる御慈悲に氣付かせていたゞいたのが信心であります。こゝに氣が付くと、今迄は御佛の廣大なる御恩を忘却し、君の御恩をも忘れ、親の慈悲にも感ぜず、あらゆるものゝ親切をも打忘れてをりし身が、初めていかにも御佛の御慈悲は廣大無邊である、今迄は、親子親族に迷惑をかけ心配を懸けし事の淺間敷さよ、御國の御恩を忘却せる事の淺間敷さよと氣がつくのである、之が即ち信心の一念であります。今日の私の話も、茲に氣付かせていたゞきたいものであると申すのである。今日は只一席の御話なれども、先きに申上げた通り、山崎様は私の『信仰の餘瀝』により御縁を結ばれたが如くに、皆様も此一席の御話に依り、御縁を結ぶことになつたならば實に幸福であると云ふ考て御話を申すのである。昨年の暮、山崎様が私の求道學舎に御いでになつたとき、其序に於て山崎様が自分の經驗を御話になり、皆々が喜んで御話を聞いた事でありました。先程御話申した私

其うちに私の心の中に現時の宗教界は腐敗せり、如何にして之を改良すべきか、たとい身を捨てゝも之を改革せざるべからずと思ひこみて、一心に宗教界の改革の爲に身を捨てゝ改良にとりかかりました。茲に於て私は、人世の總を抛ちて其理想に向て盡力して居つたが、さて眞實最後に迄行きて、私は心も身も共に疲れ、絶體絶命の處に到りて謂へらく、自分はかく迄に總て人の爲め公の爲に盡力するにも拘はらず、自分の友達を見れば自分の如きことをなさず、自分の如きことを考へず、たゞ惘然たり、茲に到りて、世の中は誠にをるるしきものである、自分の様なことを云ふてをるものは、他の人の埋め草となり、下じきとなりをはるのである、世の中の人は皆勝手なことをしてをるのである、私が今日迄の主義によりて改革せんとするも駄目であると思ふて、茲に悲觀し始めれば、之と同時に、今迄は人を怨みず、人を疑はず、人世の不満足を云はずして満足してをつたのが、忽ち變じて、人を怨み、人を疑ひ、何事も不満足に思ひ、これもいかぬ、あれもいかぬと、人の心を疑ひ初めた。皆様は、私の前の半を聞て感心な人だと思ふならんも、今の言葉をきけば又驚くならん。かく私が一つのへだて心起りてよりは、如何なる人を見ても、へだて心が起り、疑を挾みまして、前には人を疑はず、萬事公々然としていたけれども、今は邪推の上に邪推をして、言ふに言はれぬ苦が顯れた。私の今の心は、唯私一人ではなからう、今私の言ふが如き心と皆々の思とは變らぬであらう。茲に到りて私は斯く迄邪推を重ね、社會に對しては申譯なしなど、いろいろにあれこれと考ふれば考ふる程、

人を疑ひ始めた。皆様も此心を以て暮せば、たとへ日々同一監房にありても心が隔つ、心が隔たれば肉體の隔たりよりも心の隔たりの方が尙ほ苦しく、人をにくみ、疑ひ、争ふに到る。如何なる人でも憎んだり、争ふたり、邪推する事を喜ぶものは一人もない、而れども我身に隔て心があれば自然と邪推、憎悪の心起りて、如何ともすべからず。そこで私は思ふには、嗚呼かく自分の心は腐敗せり、かゝる腐敗せる心を以て宗教を改革せねばならぬなど思ひしは誤の最も甚だしきもので、今迄の私の心は偽りなり。世の人々は自分が人に同情すれば他人が亦我に同情をよせる。然るに我は今迄人に同情せず、人に同情せずして自分が人に同情をせられむと願ふのは無理なる注文なり、偽なり。總て世の中は五分五分にて争ふが人世の有様なり、地獄を外界に求むるに及ばず、己れの隔て心よりして他の人迄も地獄に引きをらす、他人が自分に向つて親切にしてくれても、自分の方に隔て心があり、疑ひ心がある故に、地人の慈悲親切も、眞受けに受けず、をまけに、その人を疑ふ、從て他人の同情を失ふのみならず、他人をも共に地獄に引き入るゝなり。如斯隔て心あり疑心のある人は、日々自分のみならず他と共に手を引き合ひて三惡道に行くと云ふことになる。今一步を進めて云へば、既に云ひしが如く、人は五分五分なれば、こちらが人に向て五分よくすれば向ふもよくす、十分よくすれば十分よくす、自分より隔て心を去れば向ふも隔てず、こちらよりへだつるが故に向ふも隔て、反對に言へば向ふが隔つる故にこちらがへだつと言ふも同じことなり。併しながら、言ふに易く行ふは難し。口にて隔て

をとりされば世の中は圓滿にゆくと云ふは易すけれども、心は全く口とは反對にして、なかなか隔て心はとられない。茲を以て私も半年の間苦めり、此時の私の心中の如く總ての人亦きつと、かゝる心に住するならん。かくて憂惱の極、私は病にかゝり苦しみました、此時に及んでは信仰の書物を見ても、念佛を稱へても、私の心に安心がでなかつた。平日の理窟は理窟としては高尚なれども、今の絶體絶命と云ふ時には、やくにたゝぬ。而して私が今日より此時の事をふりかへりみて思ふ事は、その私が苦惱してをつたとき友達が言はれるには、君はかく迄なげかるゝけれども君が平生正しき人なる事は吾等既に承知せり、何ぞかく迄なげくやと、併し私は、たとい正しき人なる事を承知せりと云ふてくれる人ありても安心はできぬ。彼の友は只私の外面丈を見て斯く言ふてをる丈けである、我れは彼を欺きたぶらかしてをるのである、世の中は只表面のみを見てよければよいと言ふが、併しこちらに隔て心あれば、人がよいと言ふた位の事では安心がでなない。又之に反して、友達が如何にも君がわるいと云へば、嗚呼彼れも終に我を見捨てたなと考ふ。然れば友達が悪いと言ふも安心はできぬ、よいと云ふも安心はできぬ。こゝに望み全く絶へなんとして一道の望あり、嗚呼我が過去の事を知りぬいて、其上、今はかゝる境遇にあり、即ち隔て心、疑ひ心ありて一人の同情者なしと考ふれば、誠に世間せまいことである、悲しいことである、同情にたへぬと、こちらのわるいことを知りぬいて、而も深き同情をよせ給ふ此親心がわからぬか、汝は世間的に人を相手にしてをるから安心はでき

ない、而も汝は疑の深きもの、汝のみならず他人も亦然り、されば五分五分の世の中に於て、眞實、心のそこ迄知りぬいて、眞實、吾れに同情を寄せてくれるものはない。それ故に、たとへあの子は氣が弱いのが性分なり、あの子は可愛そうだ、今少し意志を強くもと言ふても強くする事はできぬのである、人が同情をよせてくれても安心はならぬ、たとへ人が悪くともよいと言はれても安心はできぬ。而るに全然こちらの性質を能く知りぬいて嗚呼汝は可愛そうだ、こちらの方では汝の性質を知りぬいてをるとの給ふ、此聲が只一聲なれども五臟六腑にしみわたり、此眞實の同情心より起る慈悲深き只一人の親の心を知りぬいて、私は今日迄永き間、人世問題の爲に自分及他人を責めて苦しみ居たけれども、之が一たび彌陀の眞實心より、苦界に沈淪し苦し居る十方衆生を見給ひ、同情深き御心より之をたすけんと、南无阿彌陀佛のやるせなき御心が、速に一念に到りと云いて被下た處に安心がでるなり、こゝが最も肝要な處であります。然るに總ての人が、南无阿彌陀佛即ち佛と人世との間に隔て心を置き、御親の御慈悲をいたゞかざるによりて、その意を解せず、一たび御佛の御慈悲を思へば、こゝに喜びの心起り、今日迄は、不満足に思ひをりし私が、御佛は倫理道德をも顧ざる吾等罪深きものを、眞實見すて給ふことなき御親なりと、眞實慈悲の御心をいたゞく一念、必ず煩惱の水とけ、即ち菩提の水となる、半年の苦痛惱憂とけ、回顧すれば不思議なるかな、今迄我れを隔てたと思ふてをつた人が少しも隔てない、御佛の御恵をいたゞいて見れば、今迄へだてゝをつたと思ふて居たはう

そだ、總て以前に思ふてをつたことは偽であり、にせてある。かく御慈悲に氣がつけば、今迄隔てゝをつた友が四方より來り吾れを向へてくれる、惟ふに私は、今より十四年前には、かく多くの人に向つて信仰の御話などを今日の如くしようと豫想はしていなかつた。信仰を得ない以前は友達が我れを棄てるであらうと思ふたが、併し信仰を得た後は、全く之と反對に、人が我れを迎へてくれた。茲を以て、遂にほそぼそながらも我が信仰の有様を書きて告白せしが、即ち『信仰の餘瀝』第一章であります。

前より次第に御話申せしが如く、人世の事は、何ひとつとしてあてにならぬ、然るに、之をあてにする人あるは誤りです。かゝるあてにならぬものをあてにするよりも、超世の悲願たる御佛をあてにすべきである。超世と云ふは、御佛の御慈悲は世間普通に超へすぐれたりと云ふ心で、佛の吾等をあはれみ給ふ御慈悲心をいたゞけば、今迄は世間が吾れに迫害を加へると思つたのが自分の間違であつた、今迄の自分の考は誤つてをつた、今日迄行ふとは惡るかつた、斯く今迄の自分のやつたとがわるかつたと云ふとは、只の一言なれども、此一聲が今現に生存してをる親がきけば大に喜ぶは勿論、既に亡き親も、此一言を草葉の陰にて之を聞かば、如何に喜ぶとてあらう。人と隔てをし、互に不和となり、争を喜ぶ人はなし。たとへ争ふとも、吾れは別に争ひたくはなけれども、向ふがあゝ言ふ故、不得止争ふなり、又反對に向ふの人にきけば、向ふがあゝ言ふから、こちらもしかたなく言ふのであると、互に言ひ合ふてをるが、もしこゝに隔のなき親に遇へば、こゝに初めて私

がわるかつたと頭が下る、之は只一言なれども、此一言が價値ある一言である。こゝに到り、天下太平にして争ひなく、こゝ迄氣がつかせていたゞけば、親が喜ぶは勿論の事、此一言には、如何なる者も敵對することかできぬ。こゝに到りて願れば、以前に我は敵を愛するなどといふたは偽にて、却て我は此世に敵なきに、こちらより敵を造りたるなり。若し一たび、敵を愛する御親の前に頭がさがれば、誠に喜ばしき事である。思へ南无阿彌陀佛は、十方恒沙の諸佛之を證誠讃嘆し給ふ、此御佛を一念信ずる信仰が起れば、天下は太平なり。かく御佛は常に御慈悲を注ぎ、五劫永劫、御辛勞なされ、吾れを恒に待ちうけ給ふ御親にてまします、此御親の呼聲をさきが信念であります。私は明治三十年に、こゝに氣がつきましたより以來、今に至る迄十五年間、人と話して共に喜びもし、味ひもした、之れ全く眞實御親の御慈悲が護つて御くれる爲である。こゝがよくわかれば親の大恩、君の御恵、世の同情、總ての者のやるせない御慈悲の程が皆わかる。かくて廣大なる御恩を蒙りたることを感謝し、此念より仕事に精出し、其廣大の御恩に報ひ奉るなり、之れ即ち感謝の生活なり。以上は只一言肝要なる點を述べたのであるが、今私がこゝで御話をしたこの時を以て一線を劃し、深くこゝを喜び味ひ、此世も未來も現在も將來も相共に手を引き合ひて、所謂同一念佛無別道故の人となられよ。だいぶんがくなりましたからこれにて、、、南无阿彌陀佛々々々々々々。

信
の
力

(淺草別院貴衆兩院議員懇話會に於て)

近角常觀

私は日本の法話會の御案内を受けて、寧ろ拜聴するつもりで参つたのであります、しかるに是非御話申さねばならぬようになつてきたのは、私の信する所によれば、全く御佛の御催しと存じまするゆへ、聊か信する所を御話致します。併し唯今南條先生より懇々御話ありましたることなれば、私が之に蛇足を加ふる必要はありません、そこで私が聊か方面を變へて現代の思想界につきて御話を致さうと存じます。私は過去十年間主として青年に向つて信仰を説きつゝあるものであります、隨て現代青年の思想界の有様は能く承知して居ります、夫等の色々の思想が信仰の力によりて確かに一變して正しき思想となす事が出来るのであります、抑々現代青年の思想は随分混雜してありまして、或者は人間自然の本能を満足するを主として從來の道德の羈絆を脱せんとし、或者は胸中に一個の思想を形作りて之を以て絶對に正しき者と考へ、此理想に反する外界の制度に向て、破壊的態度をとらんとするもの、其他人生問題につきて煩悶し、家庭問題につきて互に隔意する等算へ來らば實に様々の思想が混雜して居りまして、維新當時の忠君愛國の思想を以て養成された方々には、殆ど想像し得られぬ程に荒涼して居るのであります、しかるに此等

の青年は智識上より云へば十分に教育されて居るのであります。して決して無智ではない、寧ろ國家につけ道徳につけ萬事能く承知して居るのであります、夫故たとひ如何に律法的教訓を以て之を導き、古人の格言を以て之を教へんとするも皆無効であります、何んとなれば彼等は既に十分に能く承知して居るのであります、承知しながらかくの如く思想の混雜を來すといふのは、畢竟其根本信念を缺きて居るからであります、此信念の缺乏、是實に現時思想界の病根であります、此信念を如何にして復活せしむるかといふが緊要の問題であります、しかるに此根本に着眼せずして徒らに律法的方法を以て強て秩序立てんと欲して如何に勉むるも、青年の思想と救済の方法とが齟齬して何等の効もないことになる、實に残念なることであります、しからば此信念を復活せしむるには如何にすればよいかと云へば、信仰の力によりて確かに此等の混雜したる思想を一變して、根本的に正しき思想に立歸らしむることが出来るのであります。

信仰の根本義は無限大悲の如來の本願を内心に感ずるのであります、『歎異鈔』といふ聖教に「善人なほもて往生を遂ぐ、況や惡人をや」とあります、大慈大悲の親心に罪惡の者程益々憐れみたまふのである、全體從來信仰のことを現在人生の上に味ふことを忘れて居るものゆへ信仰の力が現實生活の上に顯はれぬ、抑如來の本願といふは悟も親が子を憐むが如く、我等一切衆生に向てやるせなき佛の親心である、世間一般より言へば惡人よりは善人、罪多きものよりは罪少なきものと云ふが當り前なれども、眞實は親より云へば反對である、

善き子よ、惡しき子が餘計可愛想である。健康なる子よりも病身な子が餘計可愛想である。罪少なき子よりは罪多き子が餘計可愛想である。此と同様に大慈大悲の如來の親心は如何なる罪惡の衆生も其骨に徹し其髓に浸み込みて如何なる冷かなる心も融かすといふ無限の大慈である、其大悲の親心に感じて初めて心中に懺悔の心を生じて、私が惡るかつたといふ心を生ずる様になる、既に一たび惡るかつたといふ懺悔心を起す様になれば從來の思想を翻へして思想に立歸る事になる、現に先達て死刑に執行された十二人中二三人にかくの如く宣告と執行との間僅に數日間たるにも拘はらず信仰の力によりて全く改心して終りたる者があります、かねてより當本願寺より教誨師が遣はしてありまして彼時は監獄に寢泊りをして教誨に盡力されたのであります、或者は佛の慈悲を感じて我身の罪惡を自覺し、妻子の事を聞てすら心の亂る、様な者が、主義とか理想とか云ふて色々主張して居つたのは誤りであつた、初めて佛の慈悲を感じて悟も夢の醒めたやうな心地である、たとひ一日たりともかく念佛申す身となりて終るといふ事は人間に生れた甲斐のあつたことであるといふて懺悔をした、又或者は我に於て死すとも遺憾とすることはなきも、唯日本固有の道徳に傷つけたる罪名にて終るといふことは、かへすくも殘念であるといふたとの事てあります、かくの如く信仰の力は根本的に人間の心を翻へして人格の改造をなすものであります、かくの如く一たび自己の罪惡を自覺すれば恩を感じる様になる、そこで國主の恩、父母の恩、衆生の恩、三寶の恩を感じる様になりて天恩國恩の渥きに感泣す

るのであります。此に於て君臣の大義天地の如く千古渝らざる臣道を生ずる様になるのであります。聖徳太子は十七憲法に「篤く三寶を敬せよ、三寶とは佛法僧なり、則ち四生の終歸萬國の極宗なり、何れの世何れの人が是法を貴ぶにあらざらん、人尤も惡しきもの鮮し、能く教ふれば之に従ふ、其れ三寶に歸せずんば何を以て枉れるを正さん」と先づ信仰を説きて、此信仰によらずんば世の枉れるものを正すことの出来ぬ事を示されたのであります。既に信仰によりて正しき心に立歸る時は此に上下の秩序は自づから整然として来るのであります。故に十七憲法の次の條に「詔を承けては必ず謹め、君は則ち之を天として臣は則ち之を地とす、天覆ひ地載す、四時順行し、萬氣通ずることを得、地、天を覆はんとすれば、則ち壞れを致す耳、是を以て君言はば臣承け、上行へば下靡く是故に詔を承けては必ず、謹まずんば自ら敗る」とあります。

茲に大に注意すべきことは信仰によりて此の如く内心より思想上の轉換をなすに非ずんば現代の思想界を秩序立てることとは出来ぬといふこととあります。如何に律法的に大義を説きて教訓するとも既に承知して居るのである、法律制裁を以て強制するも中心心服するとは出来ぬのである、全體前にも既に宣ひましたる如く何事も知らぬのではない、信念が缺けて居るのであります。つまり從來の秩序思想に對して惡平等の思想に陥りて居るのであります。惡平等といふのは善惡の區別を無視して、惡しくともよいといふのも惡平等であります。上下の區別を無視して平等に考へるのも惡平等であります。

す、既に從來の秩序的・精神道德的觀念に信念が缺けて懷疑に陥りて居るのである、如何に教訓を以て法律を以て、施設を以て、之に強いたところて決して悔悟の心を起すものではない、若し惡しき思想を中心より悔悟するにあらざれば恐くは禍源を根絶するものとは申されぬ、然るに此惡平等の思想を齎へして正しき秩序ある思想に立歸らしむるものは眞實の信仰であります。惡しくともよいといふ様な横着な考を持ち、親を蔑にする様な不孝の子に對して、横着を言ふ程涙を流し、不孝の子程ます／＼心を傷ましむる親心を知らしめたらば如何でありましょう、他人の忠告には抵抗をしたり、手を振り上げて、我情をつのる強情な子供の横着者を益々憐れみ、不孝を募る程益々捨てられぬ、眞實の親の涙には頭が上がらぬであらう、心を齎さずには居られまい、絶對の大悲といふは是であります、無限の慈悲といふは是であります、是が如來の本願であります、南無阿彌陀佛の親心であります、前刻の親戀聖人の御消息に朝家の御爲め、國民のために念佛申しあはせたまひ候はば、めてたく候べしとか、念佛こゝろにいれて世のなか安穩なれ、佛法ひろまれとおぼしめすべしとは此意味であります。

借此消息につきて一言申し上げねばならぬ、既に鎌倉時代の初に於て朝家の御爲め國民の爲め念佛申せといかにも親戀聖人の御心の深き／＼思召の程を難有頂くこととあります、しかも此御消息を下されるときは尋常の時ではない、實は親戀聖人の念佛につきて鎌倉へ讒訴するものがあつて性信房を初め高足の弟子が鎌倉の問注所に出て、辯疏しつゝある時下

された御消息であります、嘗て大師法然聖人の時、念佛を停止せられしかば世に癡事の起り候ひしかば、今亦念佛の訴起りて亦世に癡事のなき様と世のいのりに心を入れ、たとひ世に念佛を誘ひ惡むものありと雖、其者を惡まぬやう之がため世に癡事のなかれかし、世の中安穩なれかし、朝廷の御爲め、國民の爲め念佛申すべしとの仰せである、古來眞宗の眞俗二諦の宗義を述ぶる時には常に拜誦する御消息であります、さりながら、何時も朝家の御爲め、國民の爲めといふ文字を讀みて御念佛申しあはせたまひ候はばめてたく候べしの文字を讀み落すことがある、是は宗教者自身のこととあります、世に勤王主義の盛んなるときは朝家の御爲め國民の爲め勤王せよといひ、世に殖産興業の盛んなるときは朝家の御爲め國民の爲め殖産興業せよといふ意味にとる、そして御念佛候べしとの一點を忘るゝ様になる憾がある、言ひ換へたならば朝家の御爲め國民の爲め、此信仰を以て盡せとの仰である、勿論信仰の上より勤王することも殖産興業をするも念佛に違ひなけれども、先づ何より先きに信仰を得て其信仰の上より世に癡事のなき様、此御慈悲の行き渡るやうと思ふて念佛せよとの深き思召であります、夫故次の文に、「往生を不定におぼしめさん人はまづわが身の往生をおぼしめして御念佛さふらふべし、わが身の往生一定とおぼしめさん人は佛の御恩をおぼしめさんに、御報恩の爲に御念佛こゝろにいれまふして、世のなか安穩なれ、佛法ひろまれとおぼしめすべしとおぼへさふらふ」とあります、往生を不定におぼしめさん人はまづわが身の往生をおぼしめして御念佛候べしとは即ち未だ信仰を得ざる

人は何より先きに信仰を得るのが肝要であります、一たび信仰を得れば上に申しました通り、我身の罪惡を自覺して、大慈大悲の恩徳を感じる様になります、夫故御報恩のためとあります、實に我等も若し此信仰の一つなかりせば如何なる思想の荒涼を來すかも知れぬ、上の十七憲法にもある通り、其れ三寶に歸せずんば何を以て枉れるを正さんであります、しかるに此信仰の一によりて天恩國恩の渾きことを知らして貰ふたのであります、して見れば御報恩の爲に御念佛心に入れたる我味ひたる味を人にも知らせて思想界の混亂を救ひ、秩序正しき信仰を振興し、世のなか安穩なれ、天下和順なれかしとの念を以て念佛せねばなりません、皆様は既に國家の爲め、國民の爲めに御盡下することとあります、何卒御念佛候べしとある點に御注意下さいまして、先づ御自身の信仰を本として、其精神を以て國家民人の爲に御盡し下することを切望いたします。



まことの愛、まことの

節操

近角常観

今日の日本に於ける婦人問題として、何人も直ちに想到するであらうと思はれるのは、二個の全く相反せる潮流に就てありませう。即ちその一は愛といふことを重んずる思想で、他の一は節操といふことをやかましくいふ方の思想であります。前者は新しい教育を受けた方の人々に依て主張せられ、後者は古風な教育を受けて来た人々の間に勢力を有つて居る様であります。而して此の二個の問題たるや、單に婦人問題として見らるゝばかりでなく、實は今日の日本の思想界に於て大に研究討議されて居る所の二大問題なのであつて、即ち愛が一步を誤れば、放縱なる自然主義となり、節操が極端となれば全く涙なき律法主義となるので、今や我國の思想界は此の二個の潮流に依て惑亂せられ、一方に自然主義、社會主義あれば、他方には押付けの忠孝主義、武士道主義が行はれて居るといふ有様であります。

新教育ある新婦人といふのも、その内容はと申せば、徒に情的方面に於て満足させようといふのであつて、家庭内に於て愛を専らにするが爲に、幸ひにして男子の不品行を制し得たとしても、之を以て直ちに清潔なる家庭、立派なる家庭と言へるか何うか、それは甚だ疑はしい。單に不品行をしないと

いふ丈のことでは、何も高尚といふ程のものではあるまいと思ひます。

私のは少し理想論であるかも知れませぬが、男子の不品行などいふことは、不幸にして日本の現在には存して居るのでありますが、之を家庭の問題として論ぜねばならぬといふのは誠に思ひべき現象で、男子の節操といふことは當然のことであつて、之を問題とせねばならぬといふことは甚だ遺憾のことと思ひます。

扱夫婦が互に専らなる愛を持つといふことも、若し其間に互に相信するといふことが缺けて居つたならば、その愛は何うかすると不健全なる自然主義に流れる様な恐れがありはしないてせうか。一體愛といふことは、夫婦の間には無くてならない要素なのでありますけれども、此の愛が清潔なものであるや否やは、信が有るかないかでまゝります。信といふものが基礎となり根本となつて、初めて神聖高潔なるものとなり得るのであります。

次に節操といふことに就て申しても、前の愛の場合と同様であつて、若し信といふことを缺いたならば、唯一個の型にはまつた、全く精神のない、形の上ばかりの極めて窮屈なるものとなります。恰も前の愛が自然主義に陥るが如く、節操も形ばかりになれば、生命がなくなり寧ろ苛酷となつて、何等の涙なき家庭となりはしないてせうか。實際今日の多くの家庭中には、斯の如き殺風景なるものが少くない様であります。それゆゑ節操の根本義も矢張り信といふことでなければなりません。夫は妻を信じ、妻は夫を信じ、斯くして相互に相信

するものでありますならば、縱令如何なることに會つても、節操は永劫に變ずることはないてありませう。貞女は二夫に見えずと申しまして、夫の一方が死んで一方が後に残つて居つても、此の二人は世を超え幽明を通じて一緒といふことになつて居るのであります。昔の人が終生節操を全うしたのは、形の上ばかりでなく、信を基礎として、精神の上より靈の意味より一致融合して居つたからであります。故に私は此の意味に於ける、信あり靈あり涙ある節操を望む次第であります。

果して然らば斯かる意味に於ける信なるものは、如何様にして來るものであるかと申すに、之は信仰から來るのであつて、信仰さへあれば必ず來るのであります。ではその信仰の内容は如何といふに、之を約して申せば、吾々此の罪惡に満てる無常の人生に迷ひつゝある者に對して、佛陀の救済は、その者を憫み給うて、眞の慈愛を以て、此の罪惡なるもの、此の汚れたる者を救ひ給ふのが佛の御心であります。故に一度此の佛の御心を感ずる一念が即ち信樂開發の一念となるので、此に初めて濁りと穢れとに満てる吾人が、清きまことなる佛の慈愛に出會ひてその光明中に攝取せらるゝこととなり、茲に於てか信仰的の人生を實現し、頓て信仰的なる家庭生活に入ることが出来るのであります。

佛教の普通の教は、聖道門自力といふ方の側で、男女何れも終生三衣一鉢の獨身生活を以て、清潔なる佛の道を辿るといふのであります。今他力救済の方から申せば、吾々の家庭生活のまゝ、士農工商それらの業務のまゝで、直ちに佛

陀の慈愛に浴して、感謝的生活をなすことの出来るのが實に佛教の妙諦なのであります。されば此の信念一度び起りぬれば、人生上凡ての道が此の信念より來り、佛の豊かなる恵みに依て夫婦互に相信することの出来るのが、前に述べた信仰的生活の基礎となる信の道なのであります。

此の事に就て尙一言注意致したいのは、私の申しますのは決して人生を主として、此の有の儘なる人生の事を以て直ちに佛陀の恵みであるといふ意味ではなくして、一度此の道を信することとなつたが爲に、その熱烈なる信仰よりして、吾々の家庭生活が佛の心を以て結びつけられたる清潔なるものとなるのであるといふ意味なのであります。然るに世の中には能く此の意味を履き違へて、吾々の日常生活は何から何まで悉く、今の此儘が直ちに佛の恵みといふ風に考へて、言はゞ穢れたる人生の上に、一寸宗教的色彩を塗り付けた丈けて、得意になつて居るのがある様ですが、之は大いなる間違ひで、信を本とし信を源として、是から生じ是から流れ出た生活でなければ、決して信仰的生活とは申されません。

されば斯かる信よりして來る所の愛にして初めて本當の愛といふことが出來、節操も亦此の意味からして本當の節操といふことが言へるので、斯うなつてこそ、愛の中に節操あり、節操の中に愛あり、人情には義理を含み、義理には人情を籠むる所の、渾然融和せる信仰的家庭生活を營み得ることゝなるのであります。

世人動もすれば佛教を誤解して、特に婦人を卑下するものゝ様に思ふ人がありますが、決して然らういふ譯のものではな

く、既に佛教の發源地なる印度に於ては、全體男尊女卑たるにも拘らず、佛の悟に就ては男女の別を問はなかつたゞけてなく、あの階級制度のやかましい國で、嚴然と區劃されて居つた四姓の別をさへも、悟の問題の上では認めなかつたのである。併し亦之を誤解して社會的に平等主義や、男女同權を主張する様に思ふものがあつたならば亦他の極端の誤解であります。されば佛教の根本義よりして男女共に同一の悟を開き得るので、特に他力信仰の上より申せば、吾々の家庭生活のまゝで佛の深き恵みに浴することが出来るので、遠くは聖德太子に依て、後には親鸞聖人に於て、此の信仰的意義ある生活を實現して居らるゝのであります。

聖德太子の妃は膳の妃と申す方で、お二人共深く佛法を尊信せられ、常に御語らひも睦しく、圓滿にして清潔なる御家庭であつたと申すことで、親鸞聖人の作られた聖德太子奉讃の御歌の中に

上宮太子の皇妃は

御かたばらにさふらふに

君わがこゝろのごとくにて

まことにさいはひなりけりと

われ死になんその日にば

きさきこたへてまうさしむ

あしたゆふべにいたるまで

いかなるこゝろいましてか

太子こたへおほします

かしはでの氏の夫人なり

太子かたりてのたまはく

ひとつのこともたがはれは

太子の御意にあひかなふ

おなじく穴にうづむべし

千秋萬歳いつまでも

つかへまつらんとぞおもふ

なほりごとを令旨ある

はじめあればなほりある

さだまれる世のことばりな

ひとたばかりならずまれしめ

人のつれのみちなれば

われあまたの身をうけて

わづかに小國の太子として

法なきところに一乘の

五濁のあしき世にまでも

きさきみなながしてぞ

ゆめ／＼おどるきおもはされ

ひとたばかりならずしぬること

むかしもいまもたふなり

佛道を行ひきたらしむ

たへなるみのりを流布せしむ

深義をひろめときをまつ

ひさしくあそびむとおもはれず

かなしみあはれみまし／＼き、云々

と申すのがあるのを見ても、その御平生が察せられるのは、ありまじせんか、殊に奇異の感に打たれるのは、一月二十二日に太子が病氣づかれますと、同日に妃も亦病の床に就かれ、越えて二月の二十一日に妃が亡くなられ、その翌日太子が亡くなられて居るといふ歴史上の事實に就てありまして、斯くても二方とも其の前年に亡くなられた間人の皇后と申す御母君と共に河内の磯長に葬り、此に三骨一廊といふのが出来て居る次第であります。

次に親鸞聖人は聖德太子を以て一代の理想として居らるゝので、聖人が家庭的の宗門を開かれたといふのも、實は遠く聖德太子に淵源して居るのであります。聖人十九歳の年、河内國磯長の聖德太子靈廟に詣て、三日間參籠の折、次の靈夢を感得せられました。それは

我三尊化塵沙界、日域大衆相應地、諸國諸國我教令、汝命根應千餘歳、命終速入清淨土、善信善信眞菩薩。

信 觀

決定解決

といふので、此の汝命根應に十餘歳なるべしといふのが、聖人を驅つて切實なる求道心を起さしめたので、爾來十年修道一日も怠らず、遂に叡山より京都六角堂に一百日の懇念を連ばれ、此に又靈夢の御告げがあつて、斷然意を決し、玉日君といふを迎へて夫人とせられ、清き麗はしき家庭を作らるゝことゝなつたのであります。而して此の六角堂が聖德太子の建立になつたものであるのは如何にも奇しき因縁ではありませんか、昔より此夢想を假托の如く信仰なき人は疑へども、これは宗教的靈感を理解せざるもので親鸞聖人の家庭に對する神聖なる信仰的意義を窺ひ得るのであります。後年聖人が流刑の迫害を受けられ、配所なる越後國國府に赴かれた時には、玉日君にも後より配所に下られ、聖人の化儀を助けて具に内助の功を致されたといふことで、慧信尼公と申すのが即ち此の玉日君なのであります。(『婦女界』)



人生問題に於て解決といふことが必要である、而して信仰問題に於ては蚤に決定といふことが干要となつてある、是即ち解決されたのである。しかるに近時人生問題、信仰問題に於て解決されざる思想が多い。即ち決定の人が多い。人生問題に於て一方に於ては善を爲さねばならぬ、惡を避けねばならぬといふ思想と、一方に於ては其善を爲す能はず、惡を避くること能はずといふ事實との、二者の間に往きたり、戻りたりして解決が出来ぬ。善を爲さねばならぬときめれば事實善を爲す能はず、惡しくてもよいときめんとすれど之を避けねばならず、何時までも解決は出来ぬのである。最後に其爲すべき善を爲すあたはず、避くべき惡を避け得ざる衆生を憐愍したまふ如來の本願に遇ひぬれば、此に初めて解決されて我等は罪業深重の至極なりと決定し、如來の願力によりて救ひたまふと決定するものである。此が決定である。二種深信の上に決定深信とある、是即ち人生問題の解決されたる有様である。罪が深いが助からねばならぬといふのでは、未だ罪の塊なりと決定深信されたのではないのである。助けて下さるには違ひなけれども、如何にも罪が深いといふ歎きの存するは、未だ即得往生と決定深信が出来ないのである。恰も甲乙二者

が相訪問して、甲が乙の宅に達したるときは、乙は不在にして恰も甲の宅に達して居る、然らばとて甲が甲の宅に歸りたるときは、恰も乙は亦乙の宅に歸りて居る、此の如く互に出違ひになりて居りては解決さるゝ所がない、即ち決定する所がない。しかるに甲に對して正面より乙が來りて、遁るゝこと能はざる様に途に遇ふときは、正に是れ解決である。汝一念正念にして直に來れ、我能く汝を護らん、衆べて水火の難に墮せんことを恐れざれとの御一言の下に、全く解決されて頭が下がりて如來の御手に攝取さるゝのである。

曇鸞大師が三不信を唱へ、道綽大師は惡慙に猶三信を加へて、淳心、一心、相續心の三者其反對の三不信展開して相成するは即ち未解決の有様と、解決の有様とである。信心不淳なる故に、決定信なく、決定信なきゆへ念相續せずといふ様に、決定が出来ぬときには何れの方面に向つても未解決である。若存若亡とか、餘念間故といふは即ち未解決の心持である。又善導大師が衆生稱念必得往生とか、無疑無慮乘彼願力定得往生とか、又成就の文の即得往生といふのが即ち決定された有様である。現に歎異抄の九章の文の如き、讀みやうが悪いと何時までも未解決の有様に止り安いのである。喜べぬは煩惱の所爲じや、煩惱があつても助けて下さるのじや、助けて下さるが喜べぬのじや、と恰も茶碗の邊を回はりて居るやうに循環して居るのは、決定出来ぬ證據じや。恰も煩惱は此室に満つるが、助くる佛は次の室に在すのであるといふ鹽梅で、其間に襖一枚隔りてある、故に決定が出来ぬのである。助けて下さるけれども喜べぬ、喜べぬけれども助けて下さる、

一往佛の光りが見えたやうに聞こえれども、根本に於て自分が善をなしたといふ考が遣つて居るのである。唯其爲したる力が佛の力であるといふ丈けの事である。然れども中心に於て善を爲したといふ考が存する時は、佛の慈悲は見えぬのである。佛の慈悲が見えるなり、今迄善を爲して居つたといふ考が翻つて、今迄善と思ふて居つたのは、有漏の善である。雜毒の善であると氣がついて、其の善を佛がさして呉れたのでは無い、其の善を翻して、斯くの如き者を助け給ふ如來の慈悲に救はれるのである。又同様に我々が、惡を爲したる時に、惡を如來が爲さしめたと云うのでは解決は着かぬ。其の惡を爲すやうな者を見捨てぬ慈悲が佛の力である、其處で斯の如き惡業の者が、我が惡を自覺して、其の惡を見捨てざる佛の力の下に、生きかへるのである。茲に於て所謂決定深信が出来るのである。

全體今日の思想界が、一面に於て、人生の苦痛人生の欠陥に煩悶をしながら、又直ちに其の煩悶自身をば、眞に價値あるものであるかの如く取り扱はんとするものが、自然主義の傾向である。言ひ換へたならば、罪の人生、迷ひの人生を攫えて、此の儘に光りの人生、悟の人生と言はんと試みて居るのである。夫れであるからいつ迄も解決がつく筈のものでは無い。同じものゝ攫えて、反對の言葉を以て取扱はんとするのである。抑々他力信仰の要點は無明に對する光明、罪惡に對する救済、衆生に對する佛陀、娑婆に對する極樂、斯くの如く二者對立したる處で、初めて他力の味ひが來るのである。爾るに近時信仰界に於ける多くの思想は、直ちに此の世界を以

此の如き心の有様として歎異抄第九章を讀むときは未決定となる。襖一重隔てゝといふ感ある間は、如何に繰返しても同様である。佛かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなればといふ一言は、襖一重隔てゝではない、恰も襖押明けて直々に仰せられた如來の勅命である、さればこそ、他力の悲願はかくの如きの我等が爲なりけりと知られたる時が決定である。さればこそ天に廻り、地に躍るほとに喜ぶべきことを喜ばずともよろしいと横着を言ふのでもない。喜ばねばならぬと押付けるにもあらず、喜ばぬにて往生はいよゝ一定とちもひたまふべきなりと解決されてゐるのである。是につけてこそ、いよゝ大慈大願はたのもしく往生は決定と存じ候へたとしかに決定されてゐるのである。法然上人も往生は一定といたゞく人は一定、不定といたゞく人は不定と仰せられたも、此一念の決定したる有様である。蓮如上人が往生は一定、御助治定と存じ候と仰せられたも、かくの如く信心決定しての上にはと仰せられたも、畢竟此信心決定人生解決の有様である。

近時人生に對する種々の思想を見るに、何れも解決せられたるものが甚だ少い。其の主なる點は、人生其の儘を以て佛の爲しわざであるとか、若しくは自然其の儘を以て悟の生活であるかの如く言ひ做す點である。抑々吾人日常生活は、善惡の二者を出てぬ。其の善惡の所行を以て、直ちに佛の力と言ふことは、結局人生其の儘を生かして置て、之に佛の名を附ける丈けの事である。我々が善を爲すのは自分が善を爲すのでは無い、佛がさせて下されたのであると言ふ時は、

て、他力的恩寵なりと言ひ、此の人生そのものを佛の働きと言ひ、我々の所作を直ちに如來の力と言ふのであるから、一面から言へば罪であり、一面から言へば直ちに光と言はうとする故に、いつ迄も解決さるゝ筈が無い。惡を見捨てぬ佛の慈悲、闇を照らす佛の光ありてこそ、初めて其の惡に對し、其闇に對して、解決を見出し得るのである。

本年夏期傳道日程

六月十九日より二十一日まで	若松市求道會
同二十三日より二十九日まで	京都、及江州郷里
同三十日より七月二日まで	越中、上段村
七月三日より七日まで	越中、中田町
同九日より十五日まで	東京夏期求道會
同二十一、二十二日 前橋市大日本佛教青年會夏期講習會	
同二十六日より八月一日まで	山口縣大津郡三隅村 東津佛教講習會
八月二日より五日まで	福岡縣田川郡講習會
同六、七日	福岡縣大隈町有田氏方
同八日より十日まで	福岡縣羽犬塚
同十一日	福岡縣八女郡泉村大内氏方
同十二日より十六日まで	周防國熊毛郡麻里府村
同十七日より十九日まで	吳市佛教青年會
同二十日より二十二日まで	廣島縣加茂郡白市
同二十三日より二十七日まで	廣島縣比婆郡山内西村
同二十八日より三十一日まで	大阪
九月一日	江州日野
同二日	江州吉田村
同三日以後八日まで	江州郷里

夏期求道會

時 日

七月九日ヨリ十五日迄一週日
毎朝午前八時開會

會 場

本郷區森川町
一番地中通

求 學 學 舍

講 題

一 親鸞聖人御作「教行信證」信卷
二 人生問題

近 角 常 觀

今回右の如く夏期求道會開會致し、兼ねて平素喜びを共にする御同朋には可成く廣く御會合を請ひ、法味談合願ひ度き希望に候間、同志の諸君は精々御參會成し下され度く候也。

追て兼ねてより上京來舍を御希望なし被下ある方は可成く此の際に御來會、好機と存じ候。

猶ほ地方より御來會の方は學舎にて御宿泊下されて宜しく候

(來聽隨意)

求 道 學 舍

訂正
増補

信仰之餘瀝

第拾壹版
定價 冊 錢
郵 稅 四 錢
袖 珍 美 本

本書は著者が十餘年前端なく苦悶の黑暗界に彷徨して、憂惱其極に達し、最後に佛陀靈活の慈光に浴して半歳の迷雲一時に消散したる時、自ら其心的經過を跡づけて、懺悔感謝の至情を表白したるもの、文字に些の修飾を加へず、ひたすら内心の實感の披瀝に努めたるは既に諸君の知了せらるゝ處なり。而して幸に發行以來江湖同朋の愛讀一日も絶ゆる事なく、今や其十一版を出すに及び本書を縁として入信せられたる諸君の多數なるは吾人の私に感謝措く能はざる所、而して先に第十版を出すに際し根本より版を改め、誤植訂正は勿論、新に増補する處六篇あり。猶ほ最後に著者が爾後の信仰經過を告白して、附録として『予が信仰的實驗』なる一篇を加へぬ。蓋し著者が信仰の根底は本書に於て明かならんとす。

近 角 常 觀 著 作

親鸞聖人の信仰

第貳版
定價 七拾錢
小包料 八錢
クロース綴

親鸞聖人の「教行信證」は、聖人が一代の信仰経験を結晶して、他方信仰の本源を闡明し給ひたる真宗根本の寶典也。而して本書は著者が入信以來起居常に此の寶典を以て自己が信仰の指針となし、日夕拜繙熟讀の餘、茲に初めて其の實驗信味の餘瀝を編述したるものとなす。幸に有縁同朋の士、一讀を賜はん事を。

發行所 求道發行所

東京市本郷區森川町一丁目九番地
東京市本郷區森川町一丁目九番地

近角常觀著

人生と信仰

定價卅錢
郵稅四錢
袖珍美本

第一章 人生問題と信仰 第二章 悲觀思想と信仰
第四章 犯罪心理と信仰 第五章 社會問題と信仰
第七章 世界宇宙と信仰
本書内容は目次に示すが如し。先年『求道』秋季號として發行したるもの近時四方同胞諸子の需要益々急切なるため、再び茲に一冊として刊行するに至りぬ。蓋し現代思想界の亂調は律法的教訓、若しくは物質的施設を以て根治する事難かるべし。獨り信仰により根本的に自覺して、初めて解脱せる眞人生に入る事を得ん。是れ本書ある所以也。人生問題の解決に志ある諸君の一讀を冀ふ。

東京市神田區本町一丁目
振寄六九六一番

求道發行所

道光

毎月一回二十五日發行
定價一圓二角
前部三拾錢
金部に限る

第四卷第五號目次(五月號)

- 道光錄
- 信仰の內面的生活と第二者
- 如來としての親鸞と人間としての親鸞
- 教界の新運動に就て

● 道光寮たより

附 録 『こども帖』

- こども帖に就て
- たよりとたより
- 兒童の宗教的感化の實例
- 歌劇對話——幸あるまゝと
- 各地に於ける日曜學校の創立及其の狀況

東京市神田區八幡下
東寺町四十二番

道光發行所

施本用小冊子

信仰之餘瀝要略

第二版

定價五錢 郵稅二錢 部數に應じ充分割引す(但し四冊迄は)
本書は某師の勸誘により、有志諸君が傳道求道の資に供せんが爲に『信仰之餘瀝』中の眼目「宗教的同朋」「活ける懺悔」「信界に於ける監獄」以下二章を抜萃し、傳道用小施本として印刷したるものなり。傳道に志し給ふ諸君の御試用を切望す。

冠唯信 唯信鈔文意鈔

新版

定價七錢 郵稅三冊迄貳錢(部數に應じ充分割引す)
『唯信鈔』は親鸞聖人の法契聖覺法印の述作にして、『唯信鈔文意』は聖人特に本鈔を尊重して、其文意を講授し給へるものなり。聖人に文意の作あるに見ても本鈔の他力信仰上如何に貴重の聖典たるかは知るに足らん。本所今此の兩書を一冊にまとめて刊行す。冠頭を加へて參照用文を引用したる等凡て歟異鈔に同じ。同朋諸君の精讀を勸む。

東京市本郷區森川町一
振寄口座一六六九六番

求道發行所

規定

本誌は毎月一回十五日發行とす
本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
凡て送金受取人名宛は「東京市本郷區森川町一番地求道發行所」とせらるべし
本誌の講讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
本誌定價左の如し

部一ヶ月	部一ヶ月	部一ヶ月	部一ヶ月	部一ヶ月	部一ヶ月
金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢
金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢
金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢
金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢
金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢
金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢
金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢
金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢
金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢	金拾錢

明治四十四年六月十二日印刷
明治四十四年六月十五日發行

發行兼編輯人

近角常觀

發行所

東京市本郷區森川町一番地

求道發行所

(振替口座東京一六六九六番)

大賣捌所

東京市神田區表神保町

東京堂

前號要目

求道

◎親鸞聖人の眞實相

序言

一 拯濟無邊極濁惡

二 法然聖人と親鸞聖人

三 聖德太子と親鸞聖人

四 『教行信證』

五 『西方指南鈔』及『聖德皇太子奉讃』

講話

◎醍醐の妙味

近角常觀

雜錄

◎親鸞聖人の傳道

近角常觀

◎親鸞聖人の『入出二門偈』

近角常觀